

第七章 林業の停滞と過疎化の中で

昭和四十九年（一九七四）から同六十三年（一九八八）まで

経済の高度成長は、既に終わりをとげ低成長時代に入った。わが国林業の停滞、木曾郡の過疎化、高校生の多様化など時代は目まぐるしく変化した。

本校では、それらに対応する改革をすすめるながらも、建学以来の山を育て、ものを創作する教育は変わることなく真摯に続けられた。

原昭PTA会長（57回）は、校名碑建立にあたり「石の如く硬い意志と木材のような柔軟かつ心温まる感覚」を山林生に期待した。母校のますますの盤石を象徴する碑である。

（写真）創立八五周年記念校名碑除幕式

昭和六一年六月二一日



はじめに

昭和四八年（一九七三）のオイルショックを契機として、我が国は、それまでの経済の高度成長から低成長時代に入った。しかし列島改造政策に象徴されるように高速道路が次々と延長され、新東京国際空港（成田）の開業、瀬戸大橋開通など巨大プロジェクトをはじめ、さまざまな開発が次々と全国各地で行われた。一方そうした開発に対して、公害反対運動と共に自然保護の声が強まったのもこのころからである。

林業は、安価な外材輸入の増大により国産材消費が低迷し、停滞した。このため林野庁は、四九年度、国有林野事業特別会計で大幅な赤字を出した。以後も累積赤字は増え続け、新規職員の採用枠を次第に減らしていったので、本校の進路指導も変更を余儀なくされ始めた。

昭和三五年頃から続いた高校進学率の向上により、木曾郡でも五〇年代にはほぼ全入に達した。そして林業が低迷する中、本校は多様化した生徒の入学を迎えることになったが、時代の変化、地域の要請に応え、常に新たな改革が続けられていた。即ち、林業科のコース制改革により同科にも女子が入学できるようになり、また工芸科では名称をインテリア科と改め教育範囲を広げた。

施設設備の充実も行われ、インテリア棟の全面改築、合宿所、プールの新設が行われた。さらにコンピュータの導入とその教

育は新しい情報化社会の到来を告げた。また蘇門会員の悲願であった「蘇門会館」も八〇周年記念事業として取り組まれ、立派に竣工し、八五周年には校門脇に校名碑も建立された。さらに蘇門会や地域の方々によって運動が進められた「長野県林業大学校」の開校は、林業を学ぶ生徒に大きな夢と希望を与えた。

林業科では、学校農業クラブへの加盟により、生徒に全国規模での活躍の場を提供し、生徒もそれに応えた。またインテリア科では、さまざまな作品展に応募すると共に、校内作品展発表会（即売会）において金賞、銀賞等の賞を設け、生徒の創作意欲の喚起に成功した。

部活動でも活躍は目覚ましかった。野球部は軟式野球で県大会決勝進出を契機に硬式野球にかえ、昭和五三年夏の活躍は県大会で木曾旋風を巻き起こした。毎年全国大会で活躍する相撲部は、同年に木曾福島町を会場に開催された国民体育大会では少年の部に出場した。また以後同会場を借りての相撲クラスマッチも行われ、校内の相撲熱も高まった。テニス部も四年連続北信越大会出場や、六二年には全国大会出場を果たした。生徒会では、歌手の加藤登紀子を招き、生のフォークソングを聞く会を開くなど、その真摯な活動は多くの人々を動かした。

林業や木工業が停滞し、生徒が多様化する中、本校では、「小さな学校の大きな役割」を合い言葉に、全校一丸となって改革が続けられ、新たな林業教育、インテリア教育を切り開こうとした。本章ではその実践の跡を検証してみたい。

第一節 本校を取り巻く社会情勢

一、オイルショック後の日本社会

1、ドルショックと第一次オイルショック

昭和四〇年代後半（一九七〇年代）に入ると、日本の国際収支、とりわけ貿易黒字の増大が国際的な非難的となった。政府は総合的経済政策を実施し、円の切り上げを回避しようとした。しかし、アメリカは緊急経済対策を発表して、金とドルの交換停止に踏み切った。これがドルショックである。

さらに四八年（一九七三）第四次中東戦争に際し、アラブ諸国がイスラエル支持国に対し原油の減産と値上げを勧告し、大手石油会社が日本に対する石油製品の一斉値上げを通告した。

このことにより、工業と生活の大半を石油に依存していた日本は大きな打撃を被ることになった。これを第一次オイルショックと呼び、その影響でトイレットペーパーの不足など生活物資の高騰とその不足は大きな社会問題にまで発展した。

2、第二次オイルショックと低成長期の政治

こうして三〇年代より続いた高度経済成長は終止符を打ち、

同四九年には戦後初めてのマイナス成長となった。これに一九七八年のイラン政変に伴う第二次オイルショックも加わり、日本は、石油一辺倒のエネルギー構造から省エネルギー、低成長時代を迎えることになった。

また四七年、沖縄祖国復帰、日中国交正常化など戦後の政治・外交の大きな課題が解決され、一方で国内政治の腐敗が大きくわが国を揺るがした。ロッキード事件、リクルート事件等がそれであり、政治家が世論の厳しい批判を受け、その姿勢が問われた。

3、巨大プロジェクトと交通網の整備

田中角栄内閣の「列島改造」に代表される開発政策、基盤整備や構造改善事業、各種補助事業、さらに新東京国際空港（成田）の開業、瀬戸大橋開通、青函トンネル開業、自動車専用道路（高速道路）の延長など巨大プロジェクトの完成が相次いだ。こうした交通網の整備は人の動きや物流を一層活発にした。

木曾谷でも昭和四八年、中央西線が電化され、国道19号線の新鳥居トンネルが五三年に開通し、さらに各地にバイパスがつくられるなど、郡内の交通網も整備され便利になっていった。

4、環境問題、公害問題の深刻化

しかし、これら開発に伴う土地の値上がりと環境破壊・公害問題も深刻化していった。そして公害反対運動が強まり、自然や環境保護の重要性が強調されるようになった。それと共に国民の林業に対する考え方も変化をみせ始めた。

一方、都市と地方との生活の格差は広がる一方で、特に農山村地域からの人口流出は依然止まらなかった。このころから都市問題と山村問題が併記されるようになり、山村の基幹産業の弱体化と過疎化が行政の課題として取り上げられ始めた。木曽郡でも依然として人口流出が続き、深刻な過疎問題を抱えることになった。

こうした中で、本校に入学する生徒の多様化も一層進み、それらに対応すべく校内の改革も進められていった。

二、国の林業政策

1、自然保護運動の活発化

昭和四〇年代から本格化した奥地林道の開発や国有林の大量積一斉皆伐は自然破壊として大きな批判を集めるようになり、四〇年代後半ごろより自然保護運動が活発化した。これら自然保護運動の多くは観光開発とともに林業を自然破壊の元凶とし

てとらえ、林業活動自体を否定する論調が一部に生まれたりもした。国有林に対しても自然保護・自然環境保全の見地から、全国各地において天然林伐採反対運動が起き始めた。

2、山村の過疎化と造林面積の減少

昭和四八年の石油ショック後のマイナス経済成長下で、木材需要量は伸び悩み、我が国の年間消費量は、およそ一億立方メートル前後で推移した。一方山村は過疎化が進み林業労働力の減少と高齢化は一層進んだ。円高によって安い外材の輸入増大により国産材価格は低迷し、林業を取り巻く状況は年々ともに厳しくなると、森林所有者の林業に対する意欲を低下させるばかりであった。

それでも当時はまだ造林事業が少なくなつたとはいえず、昭和五九年には造林面積が一万ヘクタールの大台に達した。これは森林全体のおよそ四〇パーセント近くを占め先進国中トップクラスとなった。しかし森林の内容をみると三五年生以下の林齢が全体の七〇パーセントを占め、しかも除伐や間伐の手遅れ林分が目立ち、森林の脆弱化が心配されるようになった。

ちなみに六三年（一九八八）における造林面積は、最盛期（昭和三六年）のおよそ七分の一、十四万二千ヘクタールまで落ちこんでいる。

3、森林の公的機能重視

昭和四九年（一九七四）に政府は国民の生活環境を守る「生活環境保全林整備事業」を創設して、森林の公益的機能を重視しながら一層の保安林の整備を行った。

また、国有林は公益的機能重視による伐採量の減少や造林コストの増加傾向の中での木材価格の伸び悩み、さらに人件費の高騰によつて経営収支は四四年を境にして急速に悪化し、四六年より赤字に転落し、その後終わりの見えにくい赤字経営の時代に入ってしまった。

4、林野庁の改善計画

林野庁は昭和五三年に「国有林野事業改善特別措置法」を制定して本格的に経営改善に取り組んだ。以後三回にわたつて改善計画の策定がおこなわれ、事業運営の改善合理化、組織機構の合理化、職員の削減等を推進していった。その結果、木曾では同年からの一次改善計画で妻籠営林署が南木曾営林署に統合された。また五九年からの二次改善計画では、名古屋営林局を長野営林局の支局に、その後の六二年の三次改善計画では新規採用者の抑制等が一層強化されて、生徒にとつては国有林野に就職することは狭き門となつていった。

長い間、木曾谷住民の足にもなつていた森林鉄道が、五〇年

に廃止され、木材輸送が全てトラック輸送に切り換えられた。

5、その他の改善策

民有林においては、昭和五〇年代ごろより生育途上の人工林について、必要な間伐や保育が行われぬ事態が進み、資源政策上大きな問題になってきた。そのため政府は森林管理を早急に行うために、五四年に「国産材振興対策」や、翌五六年の「間伐促進総合対策」をはじめ多くの振興策を実施していった。また、都市化の進展に対応して、国民の間に森林を始めとする緑資源の確保に対する関心や要請が急速に高まった。このため五八年に育成途上の人工林管理の資金を国民から募り、資金提供者に立木の持分を与え、伐採収益を分収する「分収林特別措置法」ができた。

三、長野県の林業政策

1、長野県のグリーンプラン

国民経済の発展と都市化の進展に伴つて、長野県の豊富な緑が失われつつあることに憂慮して、昭和五〇年（一九七五）に県は「グリーンプラン」を策定した。これは身の周りの緑化をおこなうために、県・市町村・民間がお互いに協力し合つて県

民総参加による緑づくりをおこなうものである。これによつて憩いの森や公園、街路樹等が造成された。

2、間伐促進事業

この頃から、本県の主用樹種カラマツの木材価格が極端に低くなり、森林所有者の林業離れは深刻さを増し、全国的にみても間伐必要林が多く存在するようになった。そのため、県は五年に県単独事業として「緊急間伐促進特別対策事業」を策定した。これは、国庫補助事業の対象にならなくて、早急に間伐をしなければならぬ森林に対して補助するものであった。

3、林業後継者づくり

一方、四九年に地域林業のリーダーを育成する「林業士認定制度」を全国に先駆けて発足させ、同年に十七名の林業士が生じた。

また五三年には林業後継者の育成指導を図るために「林業指導林家制度」を発足させ、県内に十四林家を認定した。さらに五四年に「長野県林業大学校」を開校させるなど、本県は地域林業の振興や人づくりに、全国から注目される施策を展開した。

昭和五六年七月、山口村で県内初のマツクイムシの侵入が確

認された。翌年には南木曾町・長野市・更埴市に被害が確認され、しだいに全県に拡大していった。

4、森林浴構想

五七年には、長野庁が自然休養林を活用した「森林浴」構想を発表して、第一回の森林浴が同年一〇月に上松町（赤沢自然休養林）で盛大に開催された。これは、国民に森の香気を浴びて心身共にリフレッシュしてもらおうと、長野庁が景観の優れた国有林を開放したものである。これは同庁だけでなく環境庁・文部省・地元市町村などと協力して行うもので、経済優先の林業政策からの大きな転換であった。

5、長野県西部地震と国際森林年

昭和五九年九月十四日に長野県西部地震が発生した。マグニチュード六・八で震源の深さは二キロという典型的な直下型地震であった。震央王滝村を中心に各所で山崩れや土砂くずれを誘発し、二九名の死者・行方不明者を出した。

これによる林業関係の被害は、被災地一帯の大部分が国有林であることなどから、被害総額は四百億円にも達した。

六〇年に「国際森林年」を記念して「信州グリーンフェスティバル」が長野市で開催された。これは広く県民に森林・林

業に対する理解や関心を高め環境緑化を進めることを目的におこなわれる祭典で、本校をはじめ林業科を置く県下の高校では、各校ともパネル等を出展して学校紹介をおこなった。

四、環境問題と国際森林年

1、公害問題と環境庁創設

オイルショック後の日本は、まさに高度経済成長の負の遺産が表面化する時代を迎えた。それは経済だけでなく人間の生活、生命に関わる重大な課題を提起していった。

その一つが全国各地で頻発した公害問題である。熊本水俣病、富山イタイイタイ病、新潟水俣病、四日市ぜんそく等、企業と国の責任を問う住民訴訟が相次いでおこされた。国の管理責任が問われることは少なかったが、企業のさまざまな廃棄物処理に厳しい裁断が下され、住民が勝訴した結果、その後の企業と行政の環境管理体制に大きく転換を迫ることになった。

昭和四六年には、当時急速に芽生えた自然保護と公害対策を目的に環境庁が創設された。これにより各企業が有害物質を含む排水、排煙、廃棄物に厳しい規制値をもうけられることになった。こうして他国に類を見ないほどの公害対策をとることになった。

また国立公園が環境庁に移管になったため、林業職公務員の

中より環境庁に採用されるものが出てきた。

2、森林破壊への警鐘

一方グローバルな環境問題も徐々に提起されるようになるものころである。それらは国際問題として国連で取り上げられるようになった。

地球温暖化、砂漠化、海洋汚染、オゾン層の破壊、酸性雨等であるが、中でも森林資源の減少は、N A S Aの宇宙飛行士によるアマゾン火災報告に端を発し、大きく地球環境問題としてクローズアップされた。

とりわけ熱帯林の減少は、先進各国の商業伐採と開発途上国の人口爆発による焼畑や燃料伐採によるものであった。

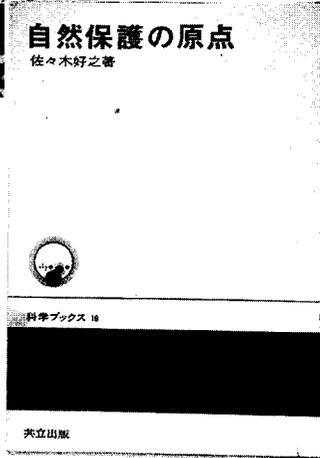
そしてそれら森林破壊の急速な拡大は、地球温暖化や砂漠化など人類にとって多大な損失で、早急な対策が必要であることが初めて認識された。その結果国連は昭和六〇年（一九八五）を国際森林年と定め全世界の森林資源の減少に警鐘を鳴らした。

3、自然保護と森林再生

広島大学助教授（理学博士）佐々木好之（40回）著『自然保護の原点』が、昭和四八年に刊行された。しかし著者の佐々木は病のため本書の原稿を残して前年他界していた。生前、彼は



写7-2 佐々木好之
(40回)
(自著より)



写7-1 佐々木好之著
『自然保護の原点』

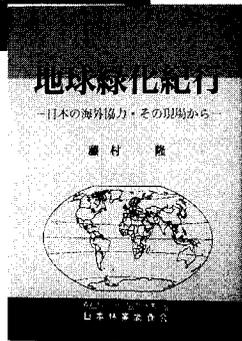
植物社会学を専門とし、日本の自然保護思想の普及のための、こうした著作で原生林化運動や自然保護大学創設を提唱した。佐々木をはじめ、本校に学び「山を愛す」の精神のもと自然保護を訴えた卒業生は多い。

日本では、このころより東南アジアから「森クイムシ」の悪名がつけられるほど熱帯林伐採を進め、世界一の木材輸入国となった。

この反省から林野庁などによるさまざまな企画が進められた。その中には政府開発援助による森林資源の再生プロジェクト事



写7-4 フィリピン・パンタバンガンプロジェクトでのアカシア人工林地にて。現地のフォレスターと共に。植樹祭1985年の1年後の状況(藤村隆・42回・提供)



写7-3 藤村隆著
『地球緑化紀行』

業があり、世界各地で展開された。わが国が初めて海外でおこなった森林造成事業のODA協力で、技術者のリーダーとして参加したのが藤村隆(42回)である。

彼はわが国の世界各地における森林・林業協力の礎を築き、海外植林協力に従事した二千人以上もの日本林業技術者の先達として仰がれている。以降、国際協力事業団(JICA)を通じた、長期派遣専門家として参加した卒業生(林野庁出身)は、

図7-1 政府ベースの2国間技術協力への参加者

国際協力事業団（JICA）を通じた、専門家の派遣、研修員の受入れ、機材の供与を組合わせて行うプロジェクト方式技術協力の実施において、長期派遣専門家として参加した者（長野庁出身）は次の通りである。

平成12年12月 外務省 上条邦広（59回）調べ

卒業年（回）	氏名	国名	プロジェクト内容	政府協力期間	本人派遣期間
昭和20（42回）	藤村 隆	フィリッピン	パンタバンガン林業開発計画	1976～95	3年
〳 36（58回）	石崎邦彦		草地造林、技術指導		2年
〳 37（59回）	上条邦広				2年
〳 35（57回）	大脇 昭	タイ	東北タイ造林普及計画 造林研究訓練計画	1992～98 1997～99	2年 2年
〳 35（57回）	砂山隆司	ミヤンマー	中央林業開発訓練センター計画。乾燥地帯の緑化促進のための林業普及、造林技術の向上	1990～94	2年
〳 39（61回）	畑 憲祐	ミヤンマー	アラカン山系林業開発計画	1977～82	2年
		タイ	機械集材訓練計画	1997～99	2年

表の通りである。

この他にも短期間の派遣、あるいは民間ベース、海外青年協力隊などに参加して大規模造林事業や林業技術指導にあたった卒業生も多い。

さらに国内では緑の少年団を作り、森林・林業の啓蒙活動を進めたり、低迷する林業振興を図った。教育現場においても、この影響は大きく、小学校から大学まで環境に関わる教育実践活動が行なわれ始めた。

五、長野県林業大学の開校

1、林業後継者育成構想と蘇門会

昭和五十年ごろ、長野県から若者の流出が激しくなり、それを止めるために県で産業短期大学構想がたてられ、実践的な高等教育機関を設置しようと検討された。林務部では林業後継者対策として、県の構想の中で二年制短期大学に準ずる学校を設置して林業後継者を育成する計画がたてられた。

五一年秋、中村治郎蘇門会長と芦部隆彦学校長の情勢分析にもとづいて、桜井昭雄PTA会長は木曾郡四高校PTA会長の協力を取り付け、林業短期大学設置の実現に向けて体制固めを進めた。翌五二年二月八日、本校図書館において郡下の町村長出席のもと、「長野県立林業短期大学設置期成同盟会」（以下

期成同盟会が発足した。中村治郎を会長に、佐藤誠一・黒田三郎を副会長に選出し、積極的な誘致活動がいち早く展開していった。

2、期成同盟会の請願

同月二八日には期成同盟会が、「木曾山林高校へ林業短期大学校の併設について」県議会に請願をおこなった。建設候補地が塩尻・須坂ととりざたされる中、同年五月はじめ中村会長は、地元県議、町村長及び期成同盟事務局員を帯同されて陳情をおこなった。

県側代表の企画室長が「いまだどこへも決まっていない」と答えると、会長は、すつくと立って「君は何を言うか。私はこのことは（知事から）了解を得ていると理解している。何ならこれから行って対決しよう。私は木曾に誘致することが最後の「ご奉公である」といわれ、すでに政界を引退されていたが迫力満点であったと、開校準備にあたった小林高夫氏（後、林業大 schools 校長）は述懐している。（注1）

3、林業大 学 校 設 置 の 決 議

同年七月四日期成同盟会は「木曾郡木曾福島町へ長野県林業短期大 学 校 の 設 置 に つ い て」県議会に請願し、十九日の本会議

において木曾福島町に決定された。

設置場所が木曾郡に決まった理由は、わが国の三大美林の一つとしてみとめられ、豊かな森林資源を周囲にひかえて、木材及びその関連産業が県下で最も盛んであり、森林率も九四パーセントと他に類を見ないこと等であった。

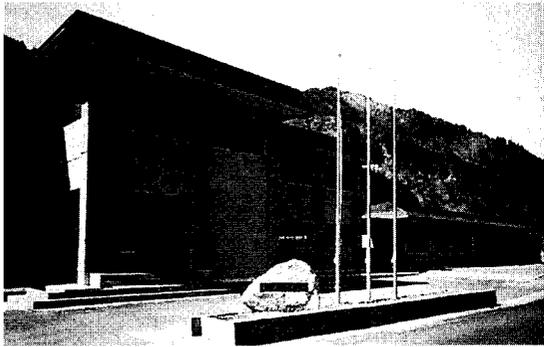
しかも、本校をはじめ林業試験場木曾分場（現、森林総合研究所木曾試験地）や多くの営林署（現、森林管理署）もあり、林業実地学習の場が随所にあつて林業教育にとって県内最適地のことであつた。

また蘇門会や地域の人々が、我がことのように、この林業大 学 校 設 立 運 動 を 支 えた 背 景 に は、開校のころからの本校国立化運動、戦後における大学昇格運動があつた。ここにも脈々と流れる母校愛を強く感ぜずにはいられない。

4、林業大 学 校 の 開 校

昭和五四年二月西沢権一郎県知事を迎えて起式を行なつた。この間開校に尽力された中村会長、佐藤誠一副会長は建設の槌音が響く中相次いで他界された。

同年四月、当初より熱心に開校に携わつた林務部の市川圭一林業課長が初代校長に就任し、第一回新入生二〇名を迎えて開校した。開校以来、演習林を測樹や測量の実習地として共に利用したり、本校職員が講師として協力している。



写7-5 竣工した本館棟・講堂棟（昭和53年6月）

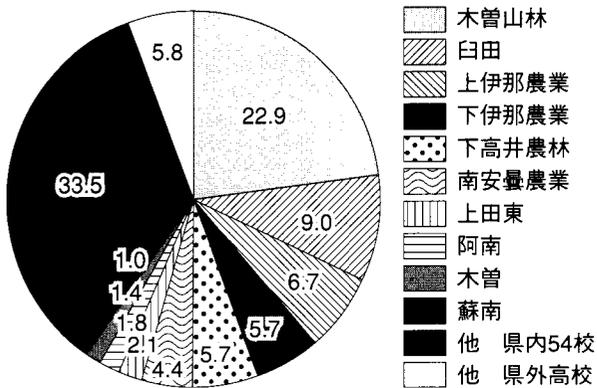
林業大学校の開校

（同校『創立20周年記念誌』より）



写7-6 着工前の風景（昭和52年11月）

図7-2 林業大学校 出身高校別入学者数



平成10年度入学生まで
同校20年誌より作成

こうして開校された林業大学校に、本校から毎年多くの生徒が進学した。特に昭和五七年度には定員二〇人中、半数近くの九名が本校卒業生であった。

さらに平成十二年度までに、同校を四二三名が卒業したが、うち本校出身者は九三名と、最も多い。このように林業大学校の開校は、林業を学ぶ若者たちに大きな夢と希望を与えた。（注2）

（注1・注2）長野県林業大学校『創立20周年記念誌』平成11年

六、少子化・過疎化と木曾西・東高校の統合

全国的な少子化傾向の中で、過疎化は木曾郡下の山間部では早くから顕著であったが、郡内全体の問題となったのは高校入学生徒数の減少による木曾東・西高校の統合問題であろう。

昭和五二年、木曾東・西高校の改築の陳情を受けた県教育委員会の判断は東西両校の統合であった。当初は各校の同窓会をはじめとする存続派の陳情もあったが、学校運営の効率化をうたう二校の発展的統合及び定時制の存続が決まった。

県教育委員会は五四年に第一期工事、五五年に第二期工事を着工した。そして五六年には元西高校跡地に新校舎と第一グラウンドが、元東高校跡地に第二グラウンドが竣工・整備され、両校より引越しが行われた。翌五七年四月に開校式と入学式が盛大に挙行され、男女共学による木曾高校がスタートした。

統合翌年には一学年、普通科一〇学級・衛生看護科一学級・定時制一学級のマンモス校が出現した。しかし木曾郡の少子化、過疎化は一層進み、その後も高校入学対象生徒数は減少を続けた。それを受けて同校は普通科の学級数を徐々に減らしていった。

第二節 本校の改革と教育実践

一、生徒の状況

1、全国的な若者の荒れと本校生徒

一九六〇年代の日米安保反対闘争に端を発した学生運動は大学生にとどまらず、一部の高校生にも及び、体制批判を訴える機運がにわかに高まった。

この頃は高度経済成長のまっただ中で、徐々に学生も経済的にゆとりが出て来た時で、勉強よりも思想信条を大切にしている学生が多くなって来た時期であった。生徒会では、学校生活環境の向上に加えて、学校批判もしばしば出された。

一九七〇年代には、ヒッピーに代表される退廃的な機運が社会全体に流れ、大学生はもとより、高校生までもが生活を乱し、勉強をおろそかにしていった。

高校生のスタイルは男子は改造学生服にリーゼントやパーマ、女子はロングスカートが流行し、集団を組んで問題行動を起こす生徒が全国的に目立ってきた。特に校内暴力が社会問題となった。

一方で受験戦争と呼ばれる大学・高校への進学熱は急速に激化し、偏差値による高校間や学科間の格差が明瞭化していった。

当時の産業界を反映して「普・商・工・農」と呼ばれるほど農業高校に対する人気は低迷し、就学困難な生徒の入学や、問題を抱えた生徒の指導に学校は苦悩を余儀なくされた。

2、低学力化傾向

昭和三〇年代半ばには、高校の進学率は六〇パーセントを越え、その後も高校進学率は鰻登りとなって、五〇年代には、ほぼ一〇〇パーセントの中学生が高校進学をするようになった。

前述の通り進学熱はますます加熱し、よい大学、進学率の高い高校、そうでなければ普通科への志向が次第に定着していった。

また、科学の進歩と高度化する産業界に対応すべく、文部省は教育課程を改定の度に内容の高度化、学習学年を低年齢化させていった。

その結果、五〇年代半ばころから学力の格差が、小学校低学年より深刻化し、勉強の分からない子供の指導対策が小・中・高校で表面化し始めた。

3、本校における生徒の多様化

全国的な生徒の荒れや低学力化は、この木曾地区でも例外ではなかった。目的の稀薄な普通科志向の強い中学生が増加した。

そのような環境の中で、本校に入学する生徒は依然として目的意識が明確で、学力の高い生徒はいるものの、低学力化の傾向は年々強まった。

本校はこの状況に対して、実にきめ細かな指導をし、生徒の学力向上と目的意識の高揚に努力した。

生徒達の進路も昭和五〇年代後半までは関連産業への就職・進学が大半であったが、次第に多様な進路選択をしていくようになった。

二、本校の教育改革

新たな問題をかかえながらも、本校の取組みは粘り強く続けられた。その雰囲気を芦部隆彦校長（昭48～52年在任）は、次のように述べた。

母校もこの一年、目に見える充実のものかを感じられませう。これら平常の積もりが何時の日にか咲くことを念じるとともに、その日の近からんことを望むものであります。

目に見えぬ 日々刻々の 積もりこそ

〔蘇門会報〕10号（昭51）

1、林業科のコース制改革と女子生徒の入学

昭和五七年度、木曾の東西両高校が統合して木曾高校が誕生した。このことは郡内中学生にも大きな影響を与えた。特に女子中学生の進路先が狭くなったのではないかと、との懸念が生まれた。事態を重くみた郡中学校長会では、本校林業科に女生徒への門戸を開放して欲しいと橋渡良知校長に要望した。

橋渡校長はそれ受け、次のような理由で林産コースの改革と共に女子受け入れを林業科に提案した。

- ・ 現状の林産コースは希望生徒が減少しており、さらに魅力あるものに改革する必要があること。
- ・ 郡中学校長会の要望もあり、女子教育を考えた教育課程の必要性があること。
- ・ 学校に情報教育が導入されて教育内容の変革が始まってきたこと。

検討した結果、林業科では、経営・土木コースはそのままとしてコースの一層充実をはかり、林産コースを情報コースに変更して女子の入学と進路の対応をはかった。

それは林業科の中のコースなので授業内容を、木材・建設・一般会社への就職を考え、ある程度の専門知識をもち、簿記・製図・情報処理にも習熟した人材の育成をねらったものであった。

これに先立ち、女子の林業科への志望は認めないとの規定は、

それまでもなかったもので、昭和六〇年度旧課程の林産コースに初めて女子一名安井奉子の入学があった。

さらに翌年の新課程（情報コース）の発足に伴い、大量十六名の入学を見た。これが林業科への女子入学である。

授業はもちろん測量の実習などでも女子生徒が男子生徒をリードしてトランシット（望遠鏡）をのぞいている場面も数多く見られた。

ただ、スパッツ、地下足袋姿の実習服で町を通って大平山演習林に行くのは死ぬほど恥ずかしかった、と後で感想をもらしたが、女生徒はよく頑張った。



写7-7 中日新聞（昭60・4・15）



写7-8 測量実習『1989年卒業アルバム』（千村和彦・元本校教諭蔵）



写7-9 パソコンを使っでの実習
(同)

簿記も日商検定の三級はほとんど合格し二級を取る者も出てきたり、レタリング検定にも合格者が多くでた。

進路も林業大学校へ進み林業公務員を目指すものなど、進学者も増えた。就職では製図の腕を生かして測量会社や、簿記・パソコンを生かして木材会社、農協、一般会社等へ進出する生徒も多かった。

なお林業科の実習は、この頃より裏山演習林の植栽可能な場所はなくなり、そのため総合実習では、径路補修や保育作業が中心となった。昭和五五年より、三班イ小班のヒノキを間伐し、ジグザグ集材によって搬出した。また、昭和五〇年頃より複層林造成を叫ばれ、本校でも五四年に六林班イ小班的カラマツ林内にヒノキを樹下植栽し、二段林造成を始めた。五七年には、二林班のヒノキ林を伐採し、その収益で城山橋を修復した。

2、工芸科からインテリア科へ

科名変更と教育内容の検討

昭和三八年（一九六三）高等学校学習指導要領改訂に伴い、木材工芸科から工芸科と科名を変更した。科名を変更しながらも工芸科教育の推進には、設備基準・教育資格・文部省との折衝等多くの問題をかかえていた。これらの問題解決には全国的組織が必要だという声が各地からあがり、三九年全国高等学校工芸科教育研究会（全芸研）が結成された。これによって地区

図7-3 林業科教育課程

教科目		(一 年)						
		一 年	二 年			三 年		
			経 営	土 木	情 報	経 営	土 木	情 報
国 語	国 語 I	4						
	国 語 II			2			3	
社 会	現 代 社 会							
	世 界 史							3 ^セ
	地 理							
	倫 理							
数 学	数 学 I	5						
	数 学 II			3			3 ^セ	
理 科	理 学 I	4						
	物 理							3 ^セ
保 健 体 育	体 育	2	2				3	
	保 健	1	1					
芸 術	音 楽 I							
	書 道 I							2 ^セ
外 国 語	英 語 I	3						
	英 語 II			3				
	英 語 II C							3 ^セ
普 通 科 目 計		23	19			11~17		
専 門 (農 業)	農 業 基 礎	4						
	測 量	4	3	4				
	育 林	2			3			
	林 産 加 工 I	2					2	
	林 産 加 工 II				2			
	林 業 経 営 I		3	2				
	林 業 経 営 II				4			
	林 業 土 木				3	2		
	農 業 水 利			2		2		
	農 業 土 木 設 計			4		3		
	材 料 施 工					3		
	簿 記 会 計				3		2	
	情 報 処 理		2		3		2	6
	設 計 製 図			2	2			2
	総 合 実 習 内					2	2	2
選 択	林 業 土 木				2 ^セ	3 ^セ	3 ^セ	
	簿 記 会 計					3 ^セ		
	林 産 加 工					3 ^セ		
	設 計 製 図					3 ^セ	3 ^セ	3 ^セ
家 庭 一 般				2 ^セ			3 ^セ	
総 合 実 習 外		(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)
専 門 科 目 計		8	12			20~14		
教 科 目 計		31	31			31		
教 科 外		1	1			1		
ホ ー ム ル ー ム (L・S)		1・1	1			1		
ク ラ ブ 活 動		1	1			1		

教科目		(二~三年)							
		一 年	二 年			三 年			
			経 営	林 産	土 木	経 営	林 産	土 木	
国 語	国 語 I	4							
	国 語 II			2			3		
社 会	現 代 社 会	4							
	世 界 史							3 ^セ	
	地 理								
	倫 理								
数 学	数 学 I	5							
	数 学 II			3			3 ^セ		
理 科	理 学 I	4							
	物 理							3 ^セ	
保 健 体 育	体 育	2	2				3		
	保 健	1	1						
芸 術	音 楽 I								
	書 道 I							2 ^セ	
外 国 語	英 語 I	3							
	英 語 II			3					
	英 語 II C							3 ^セ	
普 通 科 目 計		23	19			11~17			
専 門 (農 業)	農 業 基 礎	4							
	測 量	4	3	4					
	育 林				3		3		
	林 産 加 工 (I)				3				
	林 産 加 工 (II)				3		3		
	林 業 経 営 (I)						2		
	林 業 経 営 (II)		3	3		4	4		
	林 業 土 木						3		
	農 業 土 木 設 計				2		4		
	材 料 施 工							3	
	総 合 実 習	(2)	(2)				2	(2)	
	選 択	林 業 経 営						3 ^セ	
		測 量						3 ^セ	
		林 業 土 木						3 ^セ	
	林 産 加 工							3 ^セ	
専 門 科 目 計		8	12			20~14			
教 科 目 計		31	31			31			
教 科 外		1	1			1			
ホ ー ム ル ー ム (L・S)		1・1	1			1			
ク ラ ブ 活 動		1	1			1			

経営・土木・情報コースを設置した新教育課程表(二年)と旧課程表(二・三年)

() は時間外、○△は選択科目の組合せ

研究会（五ブロック）、全国研究会、教科書編集、教員養成等の働きかけがされるようになり前進した。しかし、地域産業の要請の上に設置された数少ない学科であり、存在価値は高めていたが、産業界の技術向上、地場産業との提携のみでなく、広い視野に立った学科の推進が要求されるようになった。

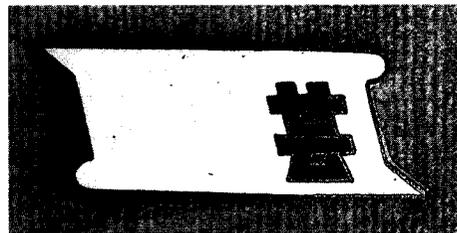
新教育課程改善協議会（昭和43年12月）は、千葉大学小原二郎先生（南木曾町出身）を招いて、工芸科の歴史的分析、工芸の語源、これからの職能分野などの多方面にわたり深く掘り下げ、教育課程の改善と科名の変更について討議された。

「インテリア科」に改称

工芸科か、インテリア科か、全国高校からのアンケート調査、意見をたたき台にし、工芸科の現状を把握・教育環境の差異・文部省初等中等教育調査官関口修先生の指針等により、インテリア科と改称することとなり、本校においても昭和四八年四月将来への発展を期して科名を変更した。

科名の変更はあったが、定着しているコース制はそのままとして、内容の充実、推進を計ってきた。特にデザインコースの内容変更が求められるようになってきた。それは女子生徒の卒業時における専門分野への進路が問われるばかりか、インテリア科の将来にもかかわる問題となるからである。

一方職業高校に対する評価は、技術・技能だけではなく、多様化が一層進む中で、社会人として適応できる人間が求められ



写7-10 工芸科として新しいスタートに当り、襟章を製作。黒い学生服にはっきり見えるように白地とした



写7-11 インテリア科として改称。インテリア総合計画、設計への方向を示すべく三角定規、T定規を表すデザインとした。また女子生徒の入学に対応し、ピン止めとした

（上・下とも元本校教諭日向昭夫のデザイン・本校へ寄贈）

るようになった。五八年教育課程改訂に伴い、幅広い人間の育成をめざして、二〇年間続いたコース制は中止し、教科選択制を取り入れることにした。技術・技能重視から、知識偏重へと進む中で、生徒の多様化も進展してきたが、こうしてインテリア科でもこれらの諸問題に対応し取組んできた。

三、研究指定校と教育実践

当時全国的に広がっていた高校生の問題行動に対して、文部省と各県教育委員会は現状を調査し、その対策を探るために全

図7-4 インテリア科教育課程

(一 年)				(二 年～三年)							
教 科 目		一 年	二 年	三 年	学 年	科 目	コ ー ス				
国 語	国 語 I	4					一 年	二 年	三 年	加 工	デ イ ザ ン
	国 語 II		2	3	国 語	現 代 国 語	3	2		2	
社 会	現 代 社 会				社 会	古 典 I 甲		2			
	世 界 史		} 3セ			倫 理 社 会		2			
	地 理			政 治 経 済				2			
	倫 理			1		2	世 界 史		3		
	政 治 経 済					1	2	地 理 A	3		
数 学	数 学 I	5			数 学	数 学 I	5				
	数 学 II		3	3 [○] セ		数 学 II A		2		3	
理 科	理 科 I	4			理 科	物 理 I				3	
	物 理			} 3セ		化 学 I		3			
	化 学					保 健 育 保 健	2	3	2		
保 健 育	保 健	1	1		保 健 育	保 健		1	1		
	保 健	2	2	3		工 芸 I	2				
芸 術	音 楽 I		} 2セ		芸 術	英 語 A	3	3	3		
	書 道 I					外 国 語	英 語 I	3			
外 国 語	英 語 II B		3		英 語 II B			3			
	英 語 II C			3 [△] セ	英 語 II C				3 [△] セ		
	普 通 科 目 計	23	16	11~17	室 内 計 画					2	
工 業	工 業 基 礎	3			工 業		室 内 材 料	2			
	工 業 数 理	2	2			室 内 装 備		2			
	実 習 (I)		3	4		家 具 生 産	2				
	製 図	3	3	4		木 工 機 械		2			
	インテリア設備		2	2		塗 装 ・ 接 着	2				
	インテリア計画		2	2		工 業 概 説				2	
	家具生産		2	2		建 築 一 般				2	
	選 択	木材工芸		} 2セ		3 [○] セ	小 計	31	31	31	
		実 習 (II)				3 [△] セ	ホ ー ム ル ー ム	2	2	2	
		製 図				3 [○] セ	ク ラ ブ 活 動	1	1	1	
実 習 (I)			3 [△] セ		合 計	34	34	34			
専 門 科 目 計	8	15	14~20								
教 科 目 計	31	31	31								
ホ ー ム ル ー ム	2	2	2								
ク ラ ブ 活 動	1	1	1								
総 計	34	34	34								

教科選択制を取り入れた新しい教育課程表（二年）とコース制の課程表（二・三年）

国に研究指定校を設置した。本校はこの研究指定校に積極的に名乗りを上げ、短期間に多くの教育実践と研究報告を提出している。

1、昭和五〇、五一年度生徒指導研究推進指定校（文部省）

文部省は昭和三九年以来、中学校・高等学校の生徒指導の改善充実に資することを目的に全国に研究推進校を指定しており、五十年には中学校四六校、高等学校四一校を指定し、二カ年にわたる研究活動を委嘱した。本校も長野県教育委員会から推薦されて研究に取組んだ。

研究主題は「人権を尊重し、差別を無くす態度を育てる生徒指導はどのように進めたらよいか」とし、研究委員会の実践計画に基づき、職員の校内・校外研修会、一クラスを対象とした集中指導、そして全校実践を行った。

その結果、指導の回を重ねるごとに生徒の姿勢は向上し、職員の見識も改革されて来たこと、継続することの重要性が報告された。

2、昭和五〇、五一年度同和教育研究指定校（県教委）

長野県教育委員会は、小・中・高校十一校を同和教育研究指定校に指定し、地域の実態に即した同和教育と各学校の果たす

役割を明らかにしようとした。

本校は、これを機会に同和教育研究委員会を設置し、被差別部落がない地域ではあるが「部落差別」「外国籍差別」「職業差別」「学力差別」の広範囲にわたる差別意識と劣等意識の排除を目指して研究実践を行ない、生徒・職員の見識改革を促す成果が報告された。

3、昭和五六、五七年度生徒指導研究推進指定校（文部省）

前述のごとく文部省は、五六年度には中学校四七校、高等学校四一校を生徒指導研究推進校に指定し、二カ年にわたる研究活動を委嘱した。

前回の研究に間をあまり開けず、本校は、研究主題を「個々の生徒に則したきめ細かな生徒指導の在り方」とし、研究推進委員会の実践計画に基づき、教科による学習指導、生活指導、進路指導、課外活動指導、寄宿舎指導、教育相談などの多岐にわたる分野で実践研究を行った。

全国的に高校教育に問題が多発する中で、本校のきめ細かな教育実践はタイムリーなものとなった。

四、推薦入学の開始

昭和五六年度から、県教育委員会は本県でも高校入学選抜

方法改善の一環として、職業科への推薦入学制と一部学科の一括（くくり）募集を実施した。

昭和五六年度推薦入学制度実施要綱（県教委）

①趣旨

職業に関する学科について、それぞれ明確な目的意識を持ち、適性を有する生徒の入学を促進する。

②対象学科及び人員

- ・ 農業、工業、商業、家庭、衛生看護に関する各学科
- ・ 当該年度卒業見込みの者、若干名

③推薦要件

- ・ 当該学科を志望する動機、理由が明白、適切であること
- ・ 当該学科に対する適性、興味、関心があること
- ・ 調査書の各記録が優良なこと
- ・ 当該学校長が定める要件を満たすものであること

④選抜方法

中学校長より送付された推薦書、調査書等の内容及び面接の結果を資料として総合的に判定し、推薦入学合格内定者を決定する。

本校でも以後、林業・インテリア科とも推薦入試を行い、目的意識の高い生徒、リーダーシップを発揮できるような生徒が入学し、校内の雰囲気盛り上げた。さらにこの入学枠も次第

に広げられていった。

五、情報処理教育の開始

1、県下初のパソコンによる情報処理教育

本校における情報処理教育は、他の工業・商業高校に比べると遅れたが、昭和五三年度からインテリア科が、五八年度から林業科が、それぞれ県の情報処理センターでの実習に参加するようになった。このように出発は遅れたが、逆に本校の場合は、当初からパーソナルコンピュータをメインに施設整備を整備していこうという方針をとった。すなわち五四年度に県下で初めてパソコンを導入（ソードM100）し、翌五五年には林業科にデジタイザ（武藤工業TⅢ）とパソコン（沖電気if-800）を組み合わせたシステムを入れている。

五六年度には本校林業科から関係の農業高校へ「農業高校における情報処理教育の推進について」という提案をし、これが契機となって五七・五八年度と研究を重ね、五九年度から農業高校にも機器の整備が始まったが、終始その推進役を本校が果たしてきたのである。

長野県情報処理センター『所報』（11号）

2、わかる授業の推進と職業教育の刷新

昭和五九年、本校は「魅力ある高校づくり事業」として、「わかる授業の推進と職業教育の刷新」をテーマに取り組んだ。その核になったのが、同年導入されたパーソナルコンピュータ（NEC PC 8801mkII）二二台であった。さらにそのねらいとして、次の三点をあげた。

① 数学・英語・国語等の科目でパソコンを個別学習機器として利用し、いわゆるC・A・I方式の学習によって「わかる授業」を研究・開発しながら実施する。

② 林業科・インテリア科の専門教育の中で、情報処理教育の一環としての実験・学習のデータ処理や、NCルーターのプログラミング等をすすめ職業教育の刷新をはかる。

③ 地域の小・中・高校へも利用を拡大し、さらに成人大学講座の開設によって地域社会における情報処理革新の推進にも寄与する。

本校「情報処理教育の概要」

これらにもとづき、次の事業を計画し実施した。

- ① 教員研修
- ② 教材開発
- ③ 林業科・インテリア科における情報処理教育
- ④ 数学の授業における利用



写7-12 職員研修の風景 橋渡校長も職員と共に研修。講師は山口登教諭

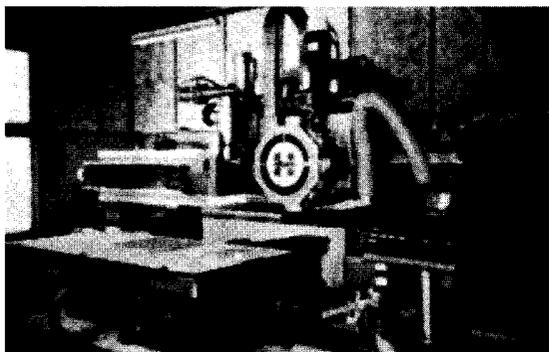
- ⑤ 校内諸文書のファイル化
- ⑥ 開放講座の開催

この結果、教員研修では校内職員のほぼ半数がパソコンを操作できるようになった。

教材開発では、数学科において「サイコロをふって確率を求めめるシミュレーション」「関数表示プログラム」「二直線の関係」を説明するプログラム」などが作成され、早速授業に活かされ、生徒の理解度の向上と学習意欲を喚起する点において大きな成

果をあげた。林業科・インテリア科における情報処理教育は、ベイシック（BASISIC）入門編でIF文、二重のループ文配列等を中心に初歩的な実習を行ったが、生徒の反応は極めて高く、普段の授業に比べて集中力、持続力という点で高く評価できるものであった。校内諸文書のファイル化では、先ず生徒指導及び生徒会関係の諸規定、事務室の会計関係の諸表が行われた。地域を対象にしたパソコンの開放講座も盛況で、二講座七九名が参加した。

これらの成果は、「中学校生徒の職業体験学習」にも早速活かされ好評を得た。また王滝中学三年生二〇名が独自に体験学



写7-13 新しく整備されたNCルーター

習に訪れたこともあった。（同年度末県教委提出「中間報告」）

さらにこの年、インテリア科にはNCルーターが設置され、本校は本格的な情報処理教育を開始するに至った。

この事業の推進に当たった山口登教諭は、その当時の模様を次のように述懐する。

情報処理教育元年

一元林業科教諭（後、下高井農林高校長） 山口 登

昭和五九年十一月五日。秋の日暮れは早く、すでに外は真暗である。この日、木曾山林高校始まって以来の本格的な成人大学講座「やさしいパソコン教室」に、地元の人たちが期待と不安をなまぜにした顔で集まってきた。後にこの受講者を中心に結成された「木曾パソコン同好会」の会長になった細川晴男さんも、いつもの食堂むつみのオヤジさんの顔とは違ってやや緊張気味で現れた。

この講座は、二講座七九名の人たちが、週二日、十五回の講習にほとんど皆勤であった。講師を勤めた私は、毎週校務をさっさと切り上げ、コンピュータ教室の鍵を開けストープを点火してから望岳寮へ行って夕食。戻ってくると早くも受講生が来ていて復習に余念がない。講座は九時に終了だが簡単には帰らない。二講座だからこの調子が月火木金と週に四日。そのうち受講生の強い希望で水曜日も個人的復習のために教室を開放することとなり、とうとう週五日の夜勤となってしまった。社

会人の皆さんの向上心は大変なもので、その姿を生徒たちに見せてやりたいようだった。

ところで二つの成人大学講座が開られるまでには随分苦労した。前年の十二月に「魅力ある高校づくりモデル事業」に、「わかる授業の推進と職業教育（パーソナルコンピュータの多面的利用）」という壮大な事業名をつけて応募し、これが県教委で採用するところとなった。三月にはヒアリングがあつて、産業教育センターの西澤照夫所長からパソコンはリースで入れるという情報もたらされ、年度を分けて整備していく計画が一気に二一台入る見通しとなり、新年度からのカリキュラムに組み込むこととなった。

ところが新年度（五九年度）がスタートしても一向にパソコンが配備される気配がない。しびれを切らして四月下旬に橋渡校長に催促すると、出張旅費を出すから県教委に行つてこいという。県教委では林雅彦指導主事（後、松本蟻ヶ崎高校長）が、目を丸くして迎えてくれた。そこで出会ったのが庶務係の駒村和久主任である、後に私が教学指導課に勤務になったとき入れ違いになったが、役人らしからぬ豪快な人物で、県下の農業高校や普通高校へパソコンを大量に配備した立役者である。話を聞くと高教組から待ったがかかっているという。北信の某校からパソコンの機種について強い要望が出されているのが原因らしい。そこで早速、高教組の中沢憲一書記長に電話を入れて、組合サイドで至急パソコン導入予定校を集めて意見の集約をし、

早く配備を進めてもらいたいと申し入れる。その際リースでたくさんの台数を導入するには各校が機種にこだわっているはダメ、という意見も進言した。

直ぐに該当校の担当者の集まりがもたれ、その日の午後には県教委交渉という段取りとなった。県教委交渉では永嶋一男高校教育指導係長（後、岡谷工業高校長）が、組合が何を言いついでか身構えているところへ、中沢書記長が「機種についてはいろいろ言わない。授業がスタートしているので一日も早く各校へ入れてもらいたい」と申し入れてチョン。私他二名がそのまま県教委に向いて、夕方遅くまで駒村さんのお手伝いをして機種選定理由書の仕様を設定し、夕食をご馳走になって帰るという愉快な一日となった。

今はなくなつてしまつた旧林業棟の二階南端（昔のインテリア科標本室）がコンピュータ教室となった。階下が林業機械室のため天井がないので、床下に電気の配線をするのが出来ない。そこで逆にコンピュータ室の天井に配線し、上からコンセントを下ろす方式とした。視聴覚教室で使うアナライザー（反応分析装置）の端末も各テーブルに設置し、理解度をチェックする体制も整つた。

使い初めは期末テスト中の七月三日の教員研修であつた。橋渡校長以下十八名の先生方が参加して和やかな研修となつた。生徒の授業の方は夏休み明けの八月二二日から始まつた。林業・インテリアの科目をやりくりして一クラスにつき、八時間

から二〇時間の授業が組まれた。ユニークだったのは中高交流で上松中学から本校にきていた嶋田秀樹先生の「数学Ⅰ」の授業だった。数学科の藤原信夫先生が開発した一次関数を表示するプログラムを使って研究授業を行い、参観にきた中学校の先生方を唖然とさせた。連立方程式を解いて、その答が合っているかどうかグラフの交点としてパッと画面上に出てくるというもので、指導にこられた藤本三郎教育委員長からは大変なお褒めの言葉をいただいた。

一〇月一日には体験学習に参加した中学生もパソコンの初体験をし、十一月十六日には王滝中学の三年生全員二〇名も体験学習に訪れた。そして最後が冒頭に述べた成人大学講座だったのである。これで「魅力ある高校づくり」として当初に計画した、

- ① 数学・国語・英語等でのわかる授業の展開、
- ② 林業科・インテリア科の専門教科としての情報処理教育の推進、
- ③ 地域社会への開放、

という三つの目標が無事スタートしたのである。

これらの活動は「情報処理教育の概要（昭和五九年度）」として学校要覧の別冊のようなスタイルで印刷物にし、県内高校に配布して大きな刺激を与えることとなった。

昭和五九年は木曾山林高校にとって「情報処理教育元年」といべき年であったと私は思っている。実に熱い一年であった。

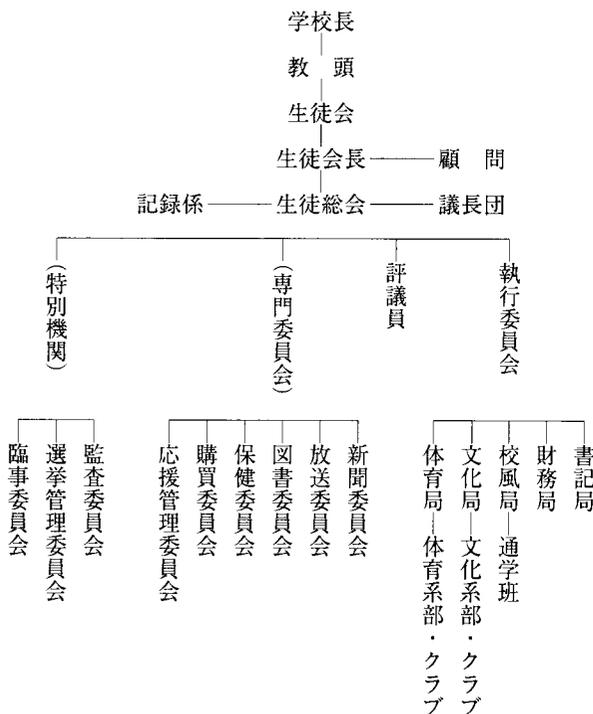
(了)

第三節 生徒の活躍

一、生徒会と部活動

昭和四九年度の生徒会には、執行委員会のもとに五つの局が置かれ、さらに専門委員会として六委員会が設置され活動していた。また、監査と選挙管理委員会が特別委員会としてあった。

昭和四九年度生徒会組織図（同年学校要覧）



この頃の生徒会行事としては、五月の強歩大会、七月の球技大会・全校討論会、九月には運動会、十月に秋の球技大会、十一月には三年に一度ひのき祭が行われ、それが無い年は文化系行事が行われた。

ほとんど消滅しかけていた応援委員会は、当時の生徒会顧問だった長坂富雄教諭（名古屋大学で応援団長の経験あり。現、愛知県立高校長）の指導で一時期復活したが、昭和五二年を最後に廃止となった。

部活動は、次の体育系十一部、文化系八部から構成されていた。

体育系

テニス・卓球・柔道・相撲・陸上・バレーボール・バス
ケットボール・軟式野球・サッカー・剣道・山岳

文化系

美術・文芸・林研部・工研部・音楽・科学・写真・演劇
『生徒手帳』（昭50）

1、三年に一度の「ひのき祭」

生徒会最大の行事であるひのき祭は、マンネリ化を防ごうとの理由から昭和四〇年度から三年に一度となった。その後六〇年度からは生徒会を活性化させようと再び毎年行われるようになった。

昭和五二年のひのき祭には直接生徒会が交渉して、歌手の加藤登紀子を招きコンサートを成功させた。単身本校に着いた彼女は、旧講堂のステージに段ボール箱を置いて、コップの水を飲みながら「琵琶湖周航の歌」、「知床旅情」などを熱唱した。その気さくな人柄と素晴らしい歌唱力に生徒も職員も感動した。

加藤登紀子
コンサート

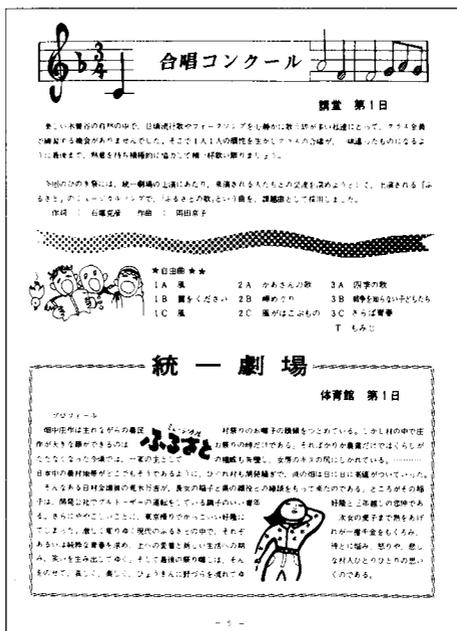


写7-14 上・下

（当時生徒会顧問教諭原喜仁・現、
南安曇農業高校・63回・蔵）

写7-15

また、劇団「統一劇場」による公演が度々実施され、劇団員と生徒の交流も盛んに行われた。上演された劇のテーマ曲などもあった。



統一劇場の公演内容を紹介した「ひのき祭」パンフレット (昭51)

2、部活動

① 相撲部

木曾谷の「早慶戦」とも呼ばれ盛んだった相撲も、校舎全面改築とからんで、昭和三六年に校内相撲クラスマッチが中断してから、山田幸雄（59回）の全国大会ベスト8進出（59年）はあったが下火となり、それと共に相撲部の活動も低調を極め、

戦績も思わしくなかった。相撲部OBや地域の人々、学校職員からも惜しむ声がたびたび聞こえてきた。

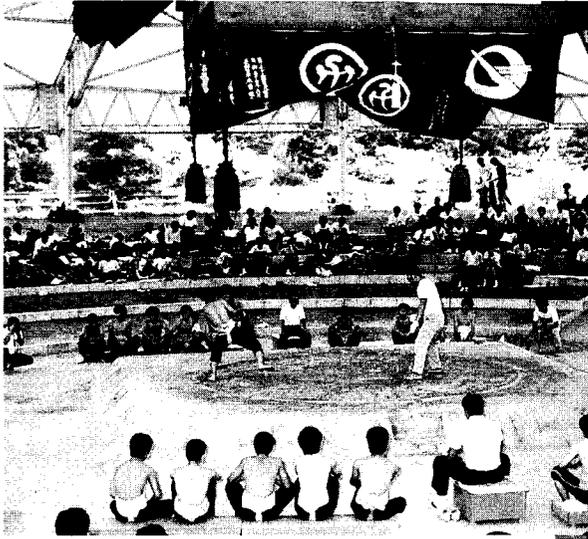
こうした中で昭和四八年に、五三年長野国体の相撲会場が木曾福島町に決まったことで、俄然活気が出てきた。改築に伴い失われた土俵も生徒の力と相撲連盟の協力により作られた。また郡内各地にも土俵が作られた。地元での大会とあつて、本校相撲部に対して指導が強化され、五年後の国体に向けて選手育成が行われた。

当面はインターハイ出場に目標をおき、連日猛けいこに励んだが成果はあがらなかった。四九年インターハイ出場権は得たが、全国大会では卒業生や企業、保護者のご協力をいただき、参加費用だけではなく土俵の修理まですることが出来たものの、戦績はあまり芳しくなく、全国レベルの高さを痛感した。

しかしその後、選手の育成が実り、五二・五三年と県大会団体・個人の優勝を勝ち取り、全国大会においても、個人戦において決勝トーナメント進出を果たすようになった。

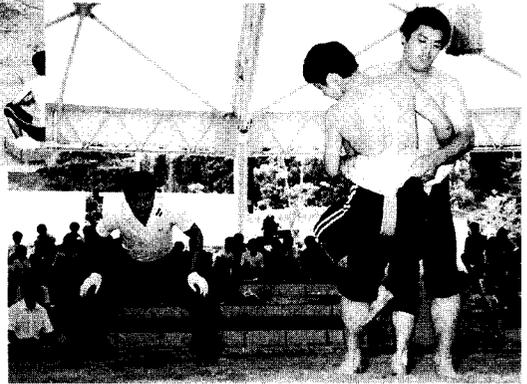
五二年においては、他の大会にも出場して成果をあげた。五年の国体においては、地元開催でもあり、毎週のように合宿を行い、少年の部において、平林正（78回）が選手として出場し一勝している。

その後の県大会においては、団体・個人とも数回優勝しており、この頃全国的にも長野県といえ、木曾山林と言われるようになり、その力は全国レベルに近づいてきていた。



写7-17

1984年『卒業アルバム』



写7-16

1982年『卒業アルバム』

相撲クラスマッチ

長野国体が終了した後、その会場を利用して校内相撲大会が行われた。女子生徒の入学増加から数年後には中止となったが、校内相撲クラスマッチは思い出深い大会であった。

② テニス部

先輩方の築いてきた伝統のテニス部も、昭和四〇年代になって一時期低迷状態にあったが、その後部員たちが頑張つて徐々に力をつけてきた。しかし、この時期は中信地区予選を経て県大会に出場できるチーム数が、団体戦四校、個人戦においては八組と少ない状況にあり、そこを突破することは大変なことであった。

五〇年代になって、秋の新人戦から県大会への出場枠が六校に増えた。さらに金井素水教諭（現、飯田長姫高校）を監督に迎えて練習態勢も変わり、盆と正月のみ練習を休むという体制が作られ、毎日の練習が熱を帯びたものとなった。こうして次第に力をつけ、県大会にも進むことができるようになった。

五〇年代後半から、六〇年代に入つては県大会への出場は常連となってきたが、なかなか勝ち進むことはむずかしく、学校対抗では一〜二回戦で敗退し、それ以上は勝てない状況であった。しかし個人戦においては、二回戦以上へ進むこともあり、五四年度から四回北信越大会に出場することができた。

昭和五四年度 下條広道（三年）・奥田隆弘（三年）組

五九年度 椎谷弘信（二年）・増沢哲也（二年）組



写7-19 本校野球部の活躍を報じた朝日新聞

よるものであった。

その後、後援会も組織され、小規模校でありながら、当時他校にはほとんどなかったバッティングマシンを導入するなど、恵まれた環境の中で、厳しい練習が始まった。

硬式転向後の出場は、五二年春の大会からだった。五三年春には公式戦初勝利と共に勝ち進み、中信地区代表決定戦まで進んだが、信州工業に負けて県大会出場はならなかった。

五三年夏の大会、一回戦では優勝候補の一つであった岩村田を破る快挙を成し遂げた。波に乗って二回戦では下伊那農業を破り、ベスト16入りした。準々決勝ではこの大会準優勝の南安曇農業に敗れたが、岐阜県出身の一年生投手原篤治の活躍は目を見張るものがあった。

●コラム 巨人軍の王監督からエール

時とすると部員の不祥事で出場停止になるのが高校野球の厳しさである。本校でも昭和五六年春そのようなことがあったが、部員たちは一丸となって逆境を乗り越えた。その間、彼等はグラウンドの石拾いを日課に一から出直し、毎日「野球日誌」をつけ始めた。日誌には練習だけでなく学校生活の悩みなど、ありのままに書いて自分を見つめた。まさに臥薪嘗胆である。そのような彼等の懸命な姿を、古川彦次校長の知人が巨人軍の王貞治監督（現、ダイエー監督）に知らせた。王監督は部員たちの真摯な様子を聞いて感激し、色紙に「克己」（己おのれに克かつ）と揮毫され本校に送って下さったのである。この王監督のエールに部員たちの喜びはひとしおで、この言葉を胸に一層精進を重ねた。彼等が再び公式戦に臨むことができるようになった時には、野球技術だけでなく学習面でも生徒会活動でも学校の模範生となっていた。

写7-20 王貞治監督から贈られた激励の色紙

応援は卒業生を中心に試合ごとに増え、県外から駆けつける卒業生もいて大フィーバーであった。

特に長野球場スタンドでのヒノキの葉による応援が話題となった。各新聞とも、硬式加入わずか二年目にしての活躍に注目を集めて、「木曾旋風」として大きく取り上げた。

しかし、残念ながらこうした活躍は長続きせず、五八年には部員数七名という状態に陥った。こうした中で、あきらめずひたすら練習に励む選手たちの姿を見て、「さわやかセブン」と新聞に掲載されたこともあった。

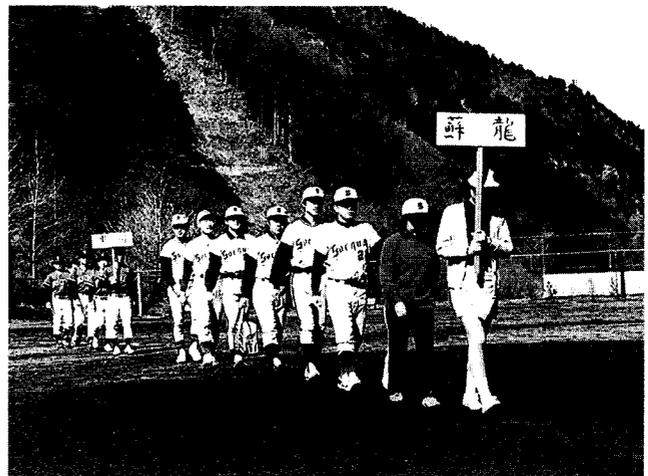
職員野球チーム「蘇龍」の応援

前述したように軟式野球部が県下でトップクラスの成績を残すようになった背景には、職員野球チーム「蘇龍」の存在が大きかった。

「蘇龍」は、昭和四八年（一九七三）、生徒の部活動の活性化につながることを願って、若い先生方を中心とした十六名の職員で発足した。

町の第一回早起野球大会から出場し常に上位入賞する活躍を見た。また野球部との練習試合も度々行われた。

発足当初は職員チームの力が勝っていて生徒たちは、なかなか勝つことができなかった。しかし練習試合を重ねるうちに生徒の実力もついて来て対職員チームだけでなく、高野連の大会



写7-21 早起き野球第10回大会入場パレード（昭和57年4月）。プラカードは平田暢子学校司書、続いてマネージャーの黒沢（高木）さと子理科助手

（原喜仁・63回・蔵）

においても勝つことができるようになって行った。

その後「蘇龍」は発足以来二〇年続いた。

3、「島崎藤村研究」図書委員会

木曾出身、明治の文豪島崎藤村の名前を、すでに生徒達の中には、名前を聞いたことはあっても、どのような人かは知らない者も増えてきた。

そのような中であつて生徒会の図書委員会では、昭和五七年度から継続研究として島崎藤村をとりあげた。国語科の大日方章教諭（現、辰野高校）・学校司書平田暢子・同上村佳子指導のもと、現地を尋ね、ゆかりの人々取材し、ひのき祭でスライドや展示を通して発表を続けた。 図書館報「こぼく」25号

昭和五七年度 七月二三日 馬籠取材（委員十八名全員参加）

馬籠の藤村記念館を中心に永昌寺、妻籠宿の奥谷郷土館を見学。さらに馬籠宿で生徒たちは、四班に分かれ、各々、カセット、メモ帳、カメラを片手に地元の人、県外から来た人に、藤村の作品と人物について取材した。その結果を次のように述べる。

県外の人は研究者を除いてほとんどが観光客で、藤村の名前すら知らない人が多かった。これに反して、地元の人々は大変好意的で、今でも「藤村先生」と呼び、毎年作品の読み合わせをしているようで、知らない人はいなかった。

ただこの背景に「観光」ということが、生活と密着しているということを見逃すわけにはいきません。しかし、藤村の「血につながるふるさと、心につながるふるさと、言葉につながるふるさと」の言葉を目の当たりにした思いがしました。

昭和五八年度 一〇月二四日 高瀬家等見学（委員六名参加）

町内高瀬家と資料館見学。藤村の人物像について、高瀬家十代新助さんに取材。藤村が、本場に「簡素」で心細やかな人物像を発見。

昭和五九年度 八月一〜二日 小諸取材（委員五名参加）

小諸懐古園の藤村記念館を見学さらにその周辺を取材。藤村に対する人々の反応を次のようにまとめた。

藤村は、地元、県外の区別なく、ごく少ない人々にしか親しまれていなかった。しかし、この小諸では、馬籠の人々のように人物に親しみを感じたり、尊敬するというものではなく、『破戒』『千曲川のスケッチ』などの作品を通して知られていた。

生徒たちは取材を通じて、藤村に対する、馬籠と小諸の人々の受けとめ方の違いを見事にとらえた。さらに「藤村が『千曲川のスケッチ』に描いたような景色は、時の流れとともになくなってしまうが、木曾とは違い広々とした小諸の自然が、藤村の文学に大きく影響したのであろうか」と、藤村文学の背景に思いをこらしたのである。

昭和六〇年度 ひのき祭で三カ年の研究をまとめて発表。

しかも、大会負担金を、東京の五万円に次ぐ三万円を拠出し、本県は全国的に見ても農業クラブに対して極めて関心の高かったことがうかがえる。本県では同年十月に長野県連盟発足を更級農業高校でおこなっている。しかし当時、本校は林業という独自の専門教育を行っているということもあつて参加しなかつた。(注1)

その後、学校農業クラブ活動の充実がはかられ、三五年改定の学習指導要領に農業クラブが位置付けられるようになり、プロジェクト学習が学校農業クラブ活動を活用することにより学習効果が高まるという認識が定着してきた。

五三年の学習指導要領の改訂によって、必修科目として「農業基礎」「総合実習」が導入され、そこに明確に農業クラブが位置付けられた。

しかも今までのクラブ活動費が個人負担であったのが、すべて公費でまかなわれることになって、五五年四月、下高井農林・白田両校の各林業科とともに農業クラブ連盟に加盟した。

なお、この前年度に一年間生徒・職員が農業クラブの諸行事にオブザーバーとして参加した。

本校においては農業クラブという言葉はなじみにくいということから、校内においては「林業クラブ」とすることにした。

各学校の農業クラブの規約を参考にして、本校独自の規約を作ることから始まり、四月に体育館で、林業科の生徒全員がそろって、農業クラブのオリエンテーションやオブザーバーとし

て参加した内山晃(78回)、黒石秀夫(79回)から一年間参加しての感想が発表された。

その後の質疑の中では「農業クラブに加盟してメリットは何か」「農業クラブの目標がわかりづらい」など生徒の鋭い質問が職員に浴びせられたりしたが、最後には生徒から「長野県の農業クラブをわれわれ山林高校生がリードしよう」との呼びかけのもと、大きな拍手の中でスタートをきった。

同年十一月に、南安曇郡穂高町で「農業クラブ四十周年記念大会」がおこなわれ、本校にはまだ単位クラブ旗がないために、校旗を持って入場し、会場からは盛大な拍手をもって迎えられた。翌年、十四万円で単位クラブ旗を購入し、名実ともに農業クラブ連盟に加盟したことになった。

長野県連盟、全国連盟への加盟にあつては、まず校内の単位農業クラブ体制の確立と、職員・生徒の学習会、参与・役員体制の確立が必要となり、会則の決定を始め、翌年からの県大会並びに全国大会への参加準備、単位クラブの執行部の決定などの準備作業が進められた。

昭和五六年四月、本校林業科は生徒全員を会員とする校内名「林業クラブ」として農業クラブの活動が始まった。

校内活動では第一回総会において林業クラブ発足の趣旨と組織・役員体制、活動内容、予算などについて説明がなされ、承認された。引き続き役員が先頭になり、プロジェクト活動や意見発表会、鑑定競技、測量競技等の活動が始まった。当時は、

生徒会執行部との役務を重複する生徒が多く多忙を極めた。

一方、校外活動へ向けては農業鑑定競技、測量競技、意見発表会、プロジェクト研究発表会へ積極的に参加し、加入当初から各種大会において優秀な成績を上げることができた。

中でも測量競技と農業鑑定競技では目覚ましい成果を上げた。元来定評ある本校の測量技術は競技としても他校を圧倒し、常に最優秀のレベルにあった。

また、農業鑑定競技の林業科部門では初年度から全国の優秀賞を得て、翌年から四年連続の全国最優秀賞を獲得する活躍で、五九年の長野大会に花を添えた。さらに長野大会では、歓迎の集いに演出し、木曾踊を披露した。

その後も小規模校ながら、プロジェクト研究と意見発表では県の最優秀・優秀賞を、測量競技(平板・水準)では、全国二位である優秀賞を、鑑定競技では全国最優秀賞を六回得る活躍をしている。

学校農業クラブに加入間もない本校が、数多くの成果をあげたことは、他校にとり驚異であり、「さすが木曾山林の生徒」という評価をさらに深めた。

(注1) 『農を学び暮らしをつくる』日本学校農業クラブ連盟

2、農業クラブ(林業クラブ)の活動

参加行事、月別計画は図7-5の通りである。

農業クラブ(林業クラブ)の校内組織

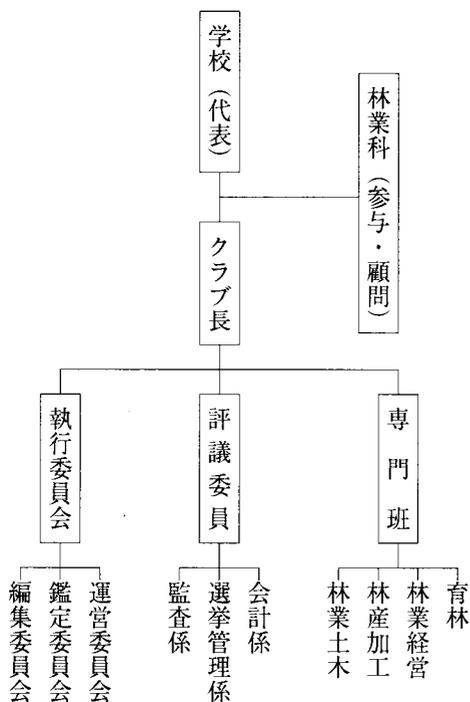


図7-5 農業クラブ月別計画

月	校内	第四地区(中信)	県連・全国連
四月	総会	第四地区会	理事・参与会 県連総会
五月	第一回林業鑑定		
六月	第二回林業鑑定	第四地区総会	県連研修会
七月	意見発表会		北信越ブロック 研修会
八月	第三回林業鑑定		各種発表大会
九月			国際教育研修会
十月			全国大会
十一月		上級検定委員会	
十二月	立会演説会 投票	上級検定	国際教育研究 実績発表会
二月	総会	第四地区会	

3、本校生徒の活躍

特に活躍の著しいものは、農業鑑定競技（林業科）、測量競技、意見発表である。前述のように全国大会で連続四回最優秀賞を獲得し、通算六回受賞した。測量競技は県大会で優勝したものが全国大会に出場でき、優秀賞に二回入賞している。

①農業鑑定部門（林業科）における全国大会最優秀者は次の通りである。

- 昭和五七年度（第33回）山口大会最優秀賞 古谷治久
- 五八年度（第34回）福岡大会最優秀賞 渡辺 孝
- 五九年度（第35回）長野大会最優秀賞 中村 悟
- 六〇年度（第36回）帯広大会最優秀賞 西路 博
- 六二年度（第38回）福島大会最優秀賞 田中義治
- 平成 元年度（第40回）大分大会最優秀賞 青木浩二

②測量競技部門の全国大会出場者は次の通りである。

- 昭和五五年度（第31回）水準測量の部 県大会初優勝
森口雅之、森孝之、水落守、奥原浩治、沢田清久、中畑浩次

昭和五九年度（第35回）水準測量の部 長野大会優秀賞

- 巾 勝幸、小林敏樹、大橋孝弘、安田勇二、井口智
- 六一年度（第37回）平板測量の部 奈良大会優秀賞
狩戸知喜、蒲沼 稔、牧 慎也、池上正孝

③測量競技部門の県大会最優秀賞の受賞者は次の通りである。

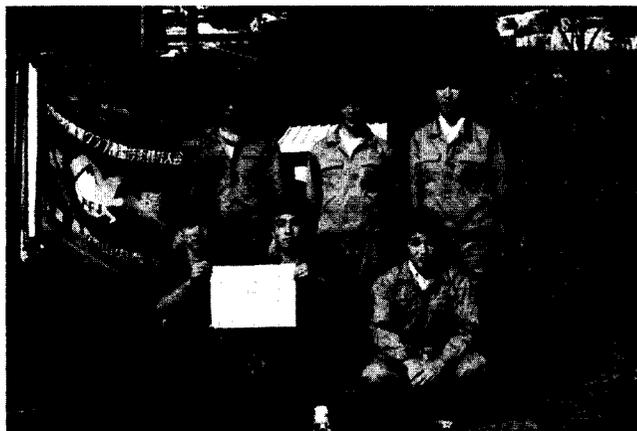
- 昭和六一年度 県大会最優秀賞
題名「緑の回復を願って」 小松 実
- 六三年度 県大会最優秀賞
題名「山づくりの苦しさを知って下さい」 上野文紀

④意見発表Bの部

昭和五八年度 水準測量 県大会最優秀賞

- 巾 勝幸、井口 智、塚本保、藤原敬一

（この年全国大会では水準測量の競技がなかった。）



写7-24 農業クラブ各種県大会で初優勝した水準チームのメンバー（下段左より森口、森、水落、上段左より奥原、沢田、中畑）

⑤ 農業クラブ全国大会ポスターの入選

昭和五九年度長野大会のポスターに中村悟（二年）の作品が入選、採用されて全国の農業高校に貼りだされた。



写7-25 中村悟（2年）の作品

この他にも県大会入賞者がいるが、その氏名は資料編に載せた。

鑑定競技において、本校初の最優秀賞をとった古谷は、その時の喜びを、次のように述べた。

農業クラブ全国大会に出場して

三年 古谷 治久

私は昨年の十一月に山口県で開催された第三三回日本学校農業クラブ全国大会に出場しました。山口は私にとって初めての地であり木曾とはちがいが、とても暖かな所でしたが、大会中雨が続き、残念でした。

この大会は全国の農業高校の代表者、五千人のクラブ員が集まり、各競技、討論会がおこなわれ、たいへんにぎやかなものでした。

私は、農業鑑定競技林業部門に出場しました。この競技は日頃授業で学んでいることの実物が、展示されており、その名称や計算を一間二〇秒あるいは四〇秒以内で答えるものです。

問題としては樹木名、肥料名、材積計算などがありました。同じ林業の部門に出場する人は、全国で六〇名近くおり、県内からは三名いました。競技の前の晩は、同じ宿舎であった為に、いっしょに勉強をしました。

いよいよ当日、競技場の前でならんで順番を待っていると、だんだんと自分の順番が近づいてきました。今まで勉強してきたことを発揮することだけを考えて、競技に臨みました。

心臓の音がだんだんはつきりと聞え出し、緊張しているのが自分でもよくわかりました。

はじめの二〇問くらいは選択問題だったので、思ったより楽にできましたが、だんだんと応用や難問が出てきて、終わった時には不安に答えたところもあり、もう絶望感でいっぱいでした。その日の夜は宿舎でもうみんな気楽になって前日の夜とは全くちがいが、夜おそくまで和気あいあいとなり、いろいろな話をしました。

話をしているとところへ引率の宮下先生から、最優秀賞だと言われましたが、冗談だと思いい信じていることができませんでした。

しかし翌朝、速報を見ると私の名前が最優秀のところに着っており、大変びっくりしました。

表彰式でステージに登った時、ものすごく緊張して、顔がひきつっているのを感じ、賞状トロフィーをもらった時は、なんとなく実感がわいてきました。

山口での長いようで短かった私の三日間はこうして終わりました。この大会では自分の知識を深めると同時に、他校の生徒と友達になれ、とても意義がありました。

また、農ク（農業クラブ）の組織の大きさ、偉大さを知りました。我校の農クはまだまだ入ったばかりのことでもあったか、活動が盛んではありませんが、五九年度に全国大会が長野県で開催されるので、農ク役員だけでなく、クラブ員みんなで協力し、是非、成功させてもらいたいです。



写7-26 最優秀賞のトロフィーと賞状を手にした古谷と指導に当たった遠山善治教諭

全国大会最優秀賞のかけには、先生方の熱心な指導がありました。約一ヶ月も前から私一人のために、競技時間十四分のために、毎晩おそくまで協力していただきました。

今後とも後輩のために、ご指導お願いします。私はこれから今の自分よりも一まわりも、二まわりも大きな人間に成るために、精一杯努力してゆきたいと思います。

【学校だより】25号（昭58・3・9）

4、機関紙『おんたけ』の創刊

本校の林業クラブ（農業クラブ）の規約（部門編参照）で、編集係会がおかれ、その任務として活動状況の収録、印刷物の発行等が決められていた。それにもとづき昭和五九年三月、機関紙が創刊された。その名前は生徒たちから募集して『おんたけ』と命名し現在に至っている。

内容は、役員の挨拶、各種行事・大会の参加記録及び感想、校内意見発表会での発表意見、プロジェクト研究の発表、卒業生の声など多彩な内容である。

十数年前まで続けられた、林業研究部の研究集録を引継ぎ、発展させる内容のものでもあった。



写7-27 『おんたけ』

三、インテリア科作品展と生徒の活躍

1、インテリア科作品展と作品賞の創設

前述したように昭和四八年（一九七三）工芸科からインテリア科と改称して、初めて迎えた作品展も好評と繁盛のうちに全作品が売却された。さらに五九年には、作品制作意欲の向上をめざして、インテリア科生徒三年生を対象に、初めて校内作品賞を設けた。初年度の受賞者は次の通りである。

- 金賞 田上幸夫（火鉢）
- 銀賞 細澤正己（食器棚）
- 銅賞 保科 勝（サイドボード）
- 努力賞 鈴木健裕（茶棚）、村井智睦（鏡台）

以後、この賞はインテリア科生徒の大きな励みになり、毎年、優れた作品が発表された。

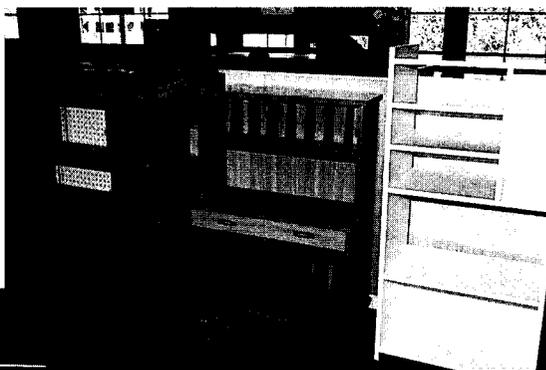
2、デザイン県展に入賞

昭和四三年第五回デザイン県展からグラフィックデザイン高校の部ができた。本校からも出品し次第にその成果もあらわれ始めた。

第一〇回には、「子ども達に創造の翼を」坂下（旧姓百瀬）京子（72回）の作品がグラフィック部門高校生の部において県教育委員会受賞。他にも松本市長賞に上條誠（73回）、長野県中小企業団体中央会長賞に山下（旧姓坂口）純人、長野放送賞に山田淳一（72回）、長野県印刷組合理事長賞に宮沢稔（73回）が入賞し、合計三三点の入賞を果たした。

続いて第十三回「私の進むべき道は」で古畑耕一（76回）が、第十五回「この子らの笑顔を二度と消さないで」で藤田（旧姓伊藤）忍（78回）が、続いて第十六回「もうたくさんだ」で吉沢道明（79回）が、それぞれ教育委員会賞を受賞。さらに入選

インテリア科生徒作品展示即売会（昭53年）



写7-28 生徒の作品

写7-29 見学、購入に訪れた人々



写7-31 昭和52年度 長野県教育委員会賞
インテリア科3年 古畑耕一



写7-30 昭和49年度 長野県教育委員会賞
工芸科3年 百瀬京子

作も多数あり、デザインコースの生徒の活躍が目だった。一方一般の部において第十三回「小さなコミュニケーション」で長野放送賞に倉本富士男（67回）が入賞した。



写7-32 昭和55年度 長野県教育委員会賞
インテリア科2年
伊藤 忍

デザイン県展と本校生徒の入賞について、当時担当の西村教諭は、次のように解説する。

『学校だより』20号

デザイン県展に出品して

インテリア科 西村 博仁

毎年、デザイン県展が秋に開催され、木曾山林高校からも多くの作品が出品されています。そして、それぞれ優秀な成績をおさめています。

このデザイン県展というのは、長野県内のデザイナーの発表の場として、また県内のデザインの普及と技術の向上を目的としたものです。長野県デザイン協会の他、長野県、長野市、松本市、上田市が主催しています。

一口にデザインといいますが、グラフィック、コマーション、ファッション、工業、工芸、テキスタイル（壁紙、ジュエ

タンなど）、サインデザイン、インテリア、建築、環境デザインと広範囲、多分野にわたっています。

ですから駅に貼られた観光ポスターばかりではなく、工芸品、ファッション画、印刷以前のデザインなど数多く出品されました。

ところで、デザイン県展では、一般と高校生とは分けて審査されますが、その中で一番優秀な作品に長野県教育委員会賞が選ばれます。

木曾山林高校からは、過去二回受賞していますが、今回も二年生の伊藤忍さんの作品が受賞しました。非常に名誉なことです。彼女の作品について、東京芸大講師・グラフィックデザイナーの福田繁雄氏は「高校生の作品は数少ないけれど、力作があったように思います。教育委員会賞をとった作品は力作の中でも力作で、テーマが高校生らしい点に感心しました」と批評しています。

確かに彼女の作品にはプロのデザイナーにはない、自分の描きたいものを自由に表現しているところ、カンボジアの難民の子供たちが戦争の悲惨な境遇の中でも笑っている姿を前面に出して、戦争への自分の気持を素直に描き表わしているところがあります。完璧な作品ではないにしても、文字も人物も、一つ一ついいねいに描き込まれている点なども、審査員の好評を得たのでしょう。

高校生にとって、B1版（模造紙くらいの大きさ）のポス

ターを制作するにはかなりの力量がないとできません。

山林の生徒は、これをなんなく仕上げてしまうところに、デザインのリベルが一樣に高いように思われます。こうした生徒がいる限り、今後も教育委員会賞を受賞できることと信じます。そしてこの伝統がいつまでも続くよう頑張ってほしいものです。

(現、中野西高校教諭)

四、平和教育と修学旅行

本校の伝統である修学旅行も、生徒の多様化及び時代の要請に応えながら、その内容を変革していった。特に山陽新幹線が博多まで開業（昭50）したこと、瀬戸大橋の開通は修学旅行における見学可能範囲を大きく広げた。本校でも広島方面まで足をのばした。

さらに見学先も林業・インテリア科の専門にかかわる所だけでなく、さまざまな場所を見学した。中でも世界で初めての原爆被災地広島を訪れ、戦争の悲惨さと平和の尊さを多くの生徒たちが実感した。

昭和五二年度二年生の修学旅行の行程

一〇月三日（月）から七日（金）まで、四泊五日

第一日目

木曾福島発・名古屋・大阪経由広島着

第二日目

(広島) 平和記念公園・原爆ドーム・慰霊碑・資料館見学

広島・宮島・倉敷・岡山着

(宮島) 厳島神社・大願寺見学

(倉敷) 大原美術館・民芸館・考古館



修学旅行の写真



写7-33 広島平和記念公園 (1979年) 『卒業アルバム』

写7-34 安芸の宮島にて (1982年) 『卒業アルバム』

第三日目

(岡山) 後楽園

林業科 岡山・鳥取・京都

(鳥取) 鳥取砂丘

(京都) 天の橋立

インテリア科 岡山・姫路・大阪着

(姫路) 姫路城

(大阪) 大阪城・角座

第四日目

林業科 京都市内着

(京都) 自由研修

インテリア科 大阪・京都着

(京都) 広隆寺・東映映画村・自由研修

第五日目

京都・木曾福島着

(京都) 三コースに分かれて見学

第四節 このころの寮生活

一、増えた郡内中学校からの入学

1、出身中学校別人数

昭和五二年(一九七七)には、郡外生が七六名(県内四九名、県外二七名)を数えたが、次第に減り六〇年代に入ると、その半分以上になった。郡外生が比較的多いという本校の特徴が薄れ、郡内生が大半を占めるに至った。(部門・資料編参照)

2、寮生の出身地

昭和四九年の望岳寮生は三三名であった。出身地を見ると県外は岐阜、静岡、新潟など、県内は長野・松本・南安・東筑・佐久・上伊那・下伊那などであった。

昭和の終わり頃になると、更に寮生の人数が減り二十名前後となった。県外出身者は岐阜の数名だけになり、県内は松塩地区と飯田伊那地区の生徒がほとんどとなった。

校舎の全面改築に伴い建て替えられた寮の定員は八十名だったが、その後入寮生が年々減少し、予算の面では寮の運営も厳しくなっていた。

二、思い出の寮生活

寮生活の思い出

八〇回 熊谷 和広

私が木曾山林高校へ在学したのは、昭和五十五年四月から五十八年三月までであり、下伊那郡阿南町出身の私は、望岳寮に入っていた。

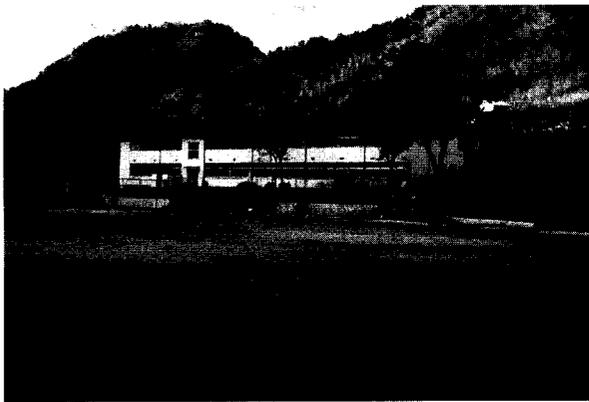
今回、山林高校が創立百周年を迎えるにあたり記念誌の執筆依頼があったので、寮生活の思い出について、特に印象深かったことを書いてみたいと思う。

現在の寮の建物は、建て替えられていて、当時の面影はないが、私の生活していた寮舎は、廊下や階段を歩くと「ギシギシ」と音がし、部屋の二段ベッドも釘を打たれたりして古い建物であった。

望岳寮に入ってまず驚いたのが、上下関係の厳しいことだった。入寮すると二年生から寮生活のことで説明を受けたが、確か「風呂にはいるときの挨拶の仕方から浴槽への入り方」、「隣の三年生の部屋から壁を叩かれたらすぐ飛んでいき、使い走りをする事。」「先輩の目は見えないこと。」等全て覚えていないが多くの掟(?)があり、また、一年生は、「テレビをみてはいけない。」「こたつで寝転んではいけない。」等の禁止事項も多くあり、えらいところに入ってしまったと正直思ったものだった。当時を振り返ってみて特に印象深かったのが「たたき」と呼

ばれていた朝の点呼後一年生だけが行く乾いた雑巾で廊下を叩きながら拭く(?)行為であった。「こんなことをして何になるんだろう。」と内心思いつながらやっていたが、とにかく先輩の言うことは、絶対聞かなければならないという状況の下に、守られていなかっただけで二年生に夜中寝ているところを起こされ、食堂の床に正座させられ足の感覚がなくなるまで延々と説教されることもあった。

次に印象深かったのが、テスト期間中の生活である。テスト期間中ともなると昼と夜が逆転し、昼間学校から帰ったらすぐ



写7-35 グランドからみた望岳寮(昭55)

寝て、夜勉強するという生活に変わる。寮の伝統なのか殆どの寮生がそうしていたが、夜更かしをしたことがなかった自分には、結構つまらかった記憶があり、今にして思えばみんなに合わせず昼勉強して夜は寝るという生活のほうがいくらかテストの

点がよかったのでは？と思ったりもする。時が経ち、結構忘れてしまった事も多いが、特につまらかった一年生の頃の事がよく覚えている。

●コラム 皆サン コンニチワ

ロータリークラブの交換留学生デビット・ジョン・ソーター君（17歳）がオーストラリアのシドニーから本校にやってきて、一年間山林生として過ごした。彼は日本のことに大変興味をもち積極的に行動した。例えば農業クラブ全国大会が長野で開かれたとき、本校生徒が出演したアトラクションの木曾踊りに参加し青い目の踊り手として注目されたり、放課後は剣道部で汗を流し、初段をとるまでになった。



写7-36 書道に励むデビット君



写7-37 デビット君の作品

第五節 記念行事と施設設備の充実

一、八〇周年記念と蘇門会館建設

蘇門会組織の充実とその活発な活動は、単に母校のみならず地域や林業界を常にリードしてきた。前述林業大学校創設はその大きなあらわれの一つである。

この蘇門会員の心の拠りどころとして、蘇門会館建設が早くから要望され、七〇周年記念事業の一環として、校地に隣接する黒川べりの私有地が買収され用地の確保が行われていた。

これを踏まえ、昭和五四年（一九七九）黒田三郎（蘇門会長22回）を会長に、蘇門会・PTAからなる「創立八〇周年記念事業実行委員会」が結成された。

そして蘇門会館の建設を中心にした記念事業が計画され、総予算は二千万円とし会員はもちろん篤志寄付をおおぐことにした。

〔記念事業の概要〕

1、蘇門会館建設（五六年五月完成）

総工費 一、七四八万円

敷地三三〇平方メートル

木造モルタル、一部二階建、延べ一八五平方メートル

一階 会議室・台所・浴室・便所

二階 和室（六畳・八畳）・資料室
合宿用大部屋（十四畳）

周囲 庭園

2、教育環境整備（県費事業）

①運動クラブ部室・体育用具室等の増改築（五五年使用開始）

②グラウンドの拡張・整備（五五年夏完成）

硬式野球に対応できるように拡張工事だけでなく西側のコンクリート擁壁やバックネットなどの施設工事を含む

③合宿所の建設（五六年三月完成）

鉄骨二階建

延べ面積約二三五平方メートル

④苗圃の整備（後述）

3、記念式典 五六年一〇月二五日

4、その他

将来本校の『記念誌』発行を考え、資料室（蘇門会館）の整備と資料の収集。特に九〇あるいは一〇〇周年を意識して、大先輩や功労者の声の集録など。

事業の中心になった蘇門会館建設の資金集めには、各役員はもちろん清水吉平校長自ら、蘇門会長・PTA会長らと共に東京や名古屋へ篤志寄付の要請に出かけた。

一方建設工事は、会員を中心に地域の方々や卒業生が就職している企業が担当した。

さらに館内の玄関や階段壁の羽目板には演習林からヒノキ材を伐り出したり、和室の床柱は中村木材（故中村治郎元蘇門会長16回）、絵画は田屋幸男画伯（36回）・稲越順郎画伯（39回）ら、校歌の掛軸は下條陸男（48回）、床の間の掛軸は宮沢誠教諭（号蜻舟・元本校教諭・塩尻・飯田長姫高校長）等々の寄贈



蘇門会館上棟式記念 S 55・12・21

写7-38 棟上げ式

をいただいた。

会館周囲の造園にあたっては蘇門会員による植木の持ち寄り、生徒達による作業等で作られた。こうして資金作りから建物はもちろん、庭園づくりまで、蘇門会員・PTA・学校・生徒たちのまさに手作りの会館となった。

これは蘇門会員の心の拠りどころとして誠に相応しいもので、それと同時に会議や合宿など本校教育の重要な施設となり、以後有効に使われることになった。

八十周年記念式典は、昭和五六年一〇月二五日に盛大に挙



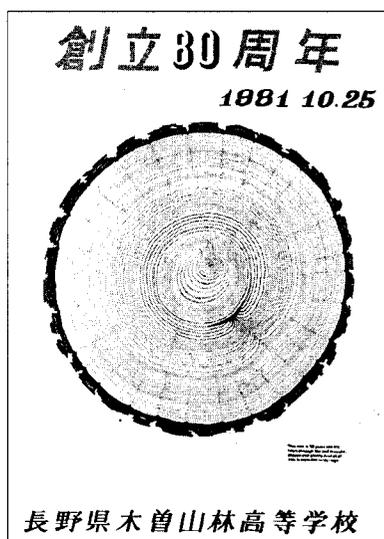
写7-39 建築中の合宿所



写7-40 完成した蘇門会館

された。式辞にたった古川彦次校長（41回）は、
本校の教育は創立当初から単に知識や技術を身につけるだけでなく、心身共にしっかりと生徒の教育に力点をおき、調査・観察・見学などを含んだ実験・実習を重視してきたが、これは本校教育の柱として現在もきびしく引継がれていることはご承知のとおりです。このことが「木曾山林の卒業生は役に立つ」という社会の評価をかちとり、本校が斯界の名門として全国に名を馳せた最大の原因であると思います。

と述べ、わが校初の卒業生校長は本校教育の伝統と心髄を説き、「いま学校は厳しい情勢下にあるが『山を愛す』の精神で新たな発展を目指したい」との決意に触れ、最後に「八〇年の伝統は生徒諸君に大きい力を与えるものと確信しています」と結んだ。



写7-41 八〇周年記念ポスター（西村博仁教諭作）が、校内外に貼られ、旅館・民宿は蘇門会員であふれた。さらに当日は朝から花火が上がるなど、町内は祝賀ムード一色であった

二、八五周年記念と校名碑建立

昭和六一年（一九八六）には、校門の周辺を整備する必要性がPTAから提唱された。それは本校の入り口が、高校のそれとしてはあまりにも似つかわしくないとの理由から、本校正面入り口としてふさわしい校名碑と門柱の建立が計画された。

この事業は当時のPTA会長原昭（57回）を中心として進め

られ、校名碑は黒川の支流上小川の河川敷から採掘した幅約二メートル長さ四メートルの岩が用いられた。

校名は橋渡良知学校長が筆を取り、黒地に金字の鋼製板を大岩に張り、コンクリート製の土台に設置した。校門はレンガ調に仕上げ、ゲートは木製の格子で両開き型であった。ゲートはほとんど使われること無く開放的であったが、門柱と校名碑はそれまでに無かった学校の風格を校外に向け放つことになった。

中間期ではあったが、この行事を八五周年事業とし、同六年六月二一日の記念式典で除幕式を行い祝った。



写7-42 除幕式（昭和61年6月21日）

三、インテリア棟の改築

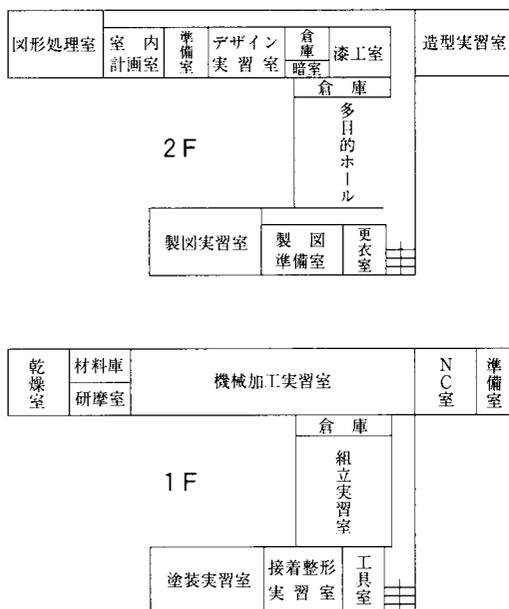
創立六〇周年を記念して昭和三五年校舎全面改築に伴い、木材工芸科の実習棟は、林業科と同じく第二期工事で建てられた木材工芸棟ではあったが、天井がなく、鉄骨がむき出しになった機械室や組み立て室は、特に夏暑くて冬寒く、雨露を防ぐだけのような教室であった。

三八年、多様化が進行する中で、木材工芸科は二つのコース制となり、女子生徒の入学、新たなデザイン教育、NCルーター（数値制御工作機械）の設置と多面的な学習が求められる時代となり、改築が検討されるようになった。築後二六年を経過した六二年、付属建物を含めて、インテリア棟の改築が開始された。

改築に先立ち、県から示された設計図には、現在ある建物を壊して同じ場所へ二棟並列総二階建てとし、廊下を連絡通路とする。一棟は木材加工を中心とした実習室棟とし、その一階は木工機械を中心とした加工実習室、二階は組み立てや塗装を行う実習室とする。

もう一方の棟は、デザインを中心とした実習棟という案が示された。しかし、一階から二階へ作品を持ち上げることや昇降することの不便さを考慮し、現有建物を参考にして再考を要望した結果、ほぼ現在のような基本設計（平面図参照）が示された。

図7-6 インテリア棟平面図



一方詳細図が完成するまでの主な要望として、二階建による不便さの解消、教室ごとの連係、音響対策、耐震性、除塵方法とその処理、凍結防止方法、冷暖房についてなども上げられた。その結果、鉄筋コンクリート二階建「コ」の字型、面積二一六一平方メートル、改築前の二倍の面積となり、総工費約三億五百万円で決定した。

いよいよ工事が開始されることになったが、それに先立ち昭和五九年十一月から地質調査のボーリングが行われて、その安全性が確認された。

六二年三月移転のための仮設校舎がグラウンドに完成し、四月からそこで授業が開始された。

一方インテリア棟の解体は雪がまだ残っている同年三月開始された。瞬く間にその原型がなくなったことは、一抹の寂しさすら感じた。

同月十七日、建設場所において工事関係者が参加して安全祈願祭が行われた。その後工事のための囲いづくりが行われ、授業中に工事を行うことから、生徒の事故防止、建物内部の詳細図等についての打ち合わせを定期的に行い、建設がスムーズに進行するようにした。

インテリア棟の建設が着々と進行する中で、それと並行して生徒便所、渡り廊下、電気機械室の建設が行われた。

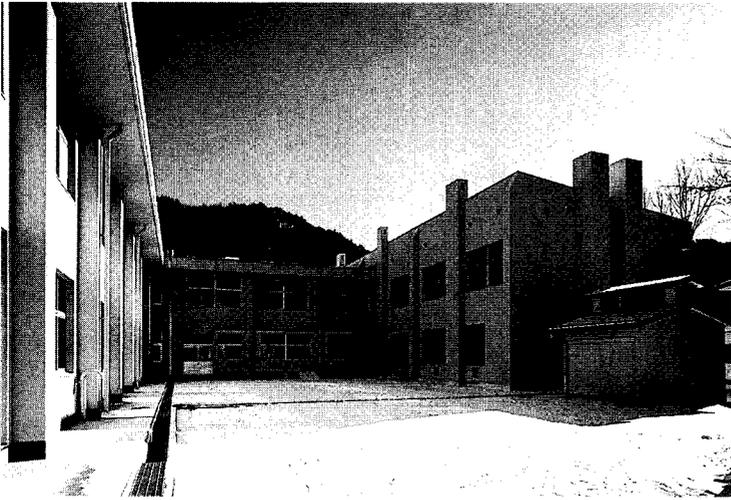
そして八月下旬には外形が出来上がり、内部設備関係工事が始まった。またそれと並行して本館、管理棟、林業棟への電気配線のための工事が校内各所で始まり、機械の音がにぎやかであった。

十一月に入り、大型木工機械N.C.ルーターの移設が始まり、付属建物の設置、翌六三年一月中には本検査も終了。木工機械の移設、電源接続、主な機械の試運転終了、電気設備関係も各種試験終了、生徒便所・渡り廊下の完了。同年二月九日すべて完了して引き渡しとなった。

明るくゆったりとした広さ、鉄筋コンクリート建ではあるが、木材をふんだんに使い暖かさを感じるインテリア棟となり、同月十九日、二木重光校長をはじめ校内関係者、インテリア科生徒も参加して竣工式が挙行された。

学校長の挨拶の後、実習棟入場のテープカット、使い始めと新築された建物の披露を兼ねて、同月二六日第四〇回インテリア科生徒作品展を盛大に開催。同年七月十三日のプールの完成と合せてインテリア棟の完成式典を挙行した。

また同年九月十三日、工業高校技術教育推進事業で、図形処理システム（パソコンCAD）が二三台設置され、インテリア科における情報処理教育の充実がはかられた。



写7-43 完成したインテリア棟

四、インテリア棟・プール完成式典

1、プールの完成

木曾の夏、泳げるのは夏休み前後合せて三〇日くらい。その間に本校では、体育での水泳授業や校内水泳大会を黒川渡ダム湖上流において行っていたので、プール建設の必要性はあまり感じていなかった。

しかし、水の汚れや安全性、女子生徒のこと。防火用貯水池の必要性、県下高校唯一プールのない学校等、環境条件の変化にともない、本校でもプールの必要性が高まり、建設着工となった。

建設予定地には、当初老朽化した講堂を取り壊して半地下にし、その上に第二体育館建設案、グラウンド北側のはずれ案などが出されたが、それぞれ問題があり、結局現在地体育館に隣接するグラウンドに決定された。

着工に先立ち、埋蔵文化財調査、地質検査を行い、昭和六三年三月十五日、予算額五千二百万円を着工した。短い工期ではあったが、七コース二五メートルプール及び更衣室、シャワー室、滅菌室等の付属施設が、七月八日竣工した。

2、インテリア棟・プール完成式典

昭和六三年七月十三日、学校、蘇門会、PTA、工事関係者など多数参列のもとインテリア棟・プール完成式典が挙行された。式次第

一、開会の言葉

二、学校長挨拶

三、感謝状贈呈（関係者）

四、祝辞 蘇門会長

武居芳太

PTA会長

榎田公雄

木曾福島町長

中村英之

五、生徒代表挨拶

生徒会長

荻村美樹

六、閉会の言葉

この中で、二木重光校長は次のような工事完成の祝辞を述べた。

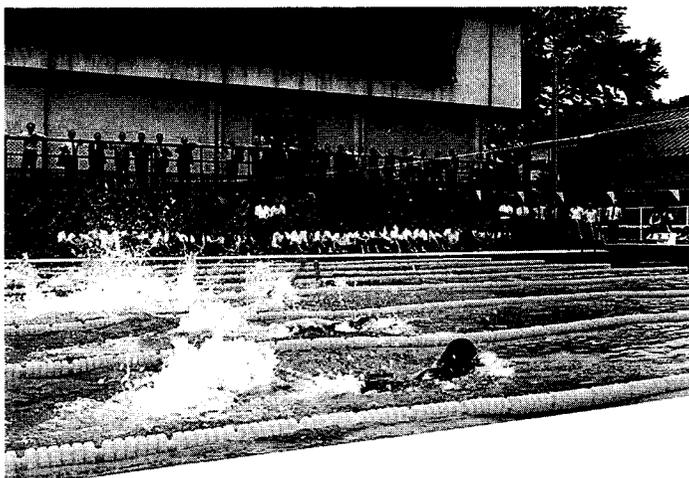
この度、県当局のご高配と関係各位のご助力により、インテリア棟の改築並びにプールの新築が完了し、その完成式典を挙行する運びとなりました。衷心より厚くお礼申し上げます。

さて八七年の永い伝統ある木曾山林高等学校にあつて、インテリア科設置は昭和四年より始まり、時代の動向や地域業界の要望に応えながら木材工芸科・工芸科・インテリア科へと改称

しました。科名変更と共に、新しい専門知識・技術の習得に必要な施設であるインテリア棟の全面改築により、さらに充実した実習教育を進めていきたいと思ひます。

またプールの新築により、水に親しむことができ、水泳技術の向上、心身の鍛練と健全な体力作りが可能となりました。

職員・生徒一同はこの新しい学舎で勉強できる幸せを大切に、地域の皆様の期待と信頼に応えるべく、決意を新たにす



写7-44 初泳ぎをする生徒たち

ものであります。最後に、この建築にご尽力いただきました関係各位に感謝申し上げます。(了)

この式典の後、早速プール開きが行われた。プールサイドに生徒が整列して見守る中、模範泳者の生徒が、学校長の号令と共に水に飛び込んで完成を祝った。

なお、プールの安全祈願祭は前日に行った。

さらに来賓はじめ関係者は、新装なったインテリア棟、プール等の施設を見学した後、多目的ホールで盛大な記念祝賀会に臨んだ。

五、久我造林と緑化運動

わが国が全国的な緑化運動やその思想を学んだのは、世界的にも著名であったバードジー・グラント・ノースロップ博士であった。

博士は明治二八年に来日し、時の牧野伸顕文部次官にアーバデー(愛林日)を説いた。明治政府はこれを受けて、同年の十一月三日を学校植栽日とし、全国の小学校に植林を実行させた。(注一)

昭和五年、大阪在住の久我俊一氏は、このノースロップ博士に感銘を受け、自ら「日本のノースロップになれれば」との思いから全国全ての都道府県に五十万円ずつ寄贈した。

長野県はこの事業を全国に先駆けて進めた。県林務部は県有林の中でも氏の意思を受け継いでいくにふさわしく、以後の保育の可能性をかんがみ、本校の演習林四林班イ小班二の〇・五一ヘクタールを選び、ヒノキ苗千六百本を植林することにした。五四年、当時その地は伐採跡地であったため、春の総合実習で生徒の手で地ごしらえを行い、林業科新入生八〇名により植栽が行われた。本事業を記念して、その年造林地の麓に清水吉平校長筆による石碑が建立された。



写 7-45 久我造林記念の碑

(表書)

ノースロップ博士顕彰

久我造林記念の碑

(裏書)

世界緑化の恩人米國ノースロップ博士を讃え、自らも緑化運動を推進される若屋市呉川町久我俊一氏の御芳志により、之を造

成する

昭和五十五年春

長野県木曾山林高等学校

●コラム 演習林に鹿の来訪

昭和五十五年十一月、演習林（第一林班）に鹿が現れた。学校に隣接する演習林は、このように自然豊かで、鹿の他に、カモシカ、ツキノワグマ、ウサギ、ムササビ、山鳥、雉、ゴイサギからマムシに至るまで生息している。かつてはウサギがたくさんおり、ウサギ狩りを行ったり、ウサギ捕りのためのワナ作りも実習で行ったという。その後も授業中の窓越しに、七林班に鹿が見られたりして、生徒の目を楽しませてくれた。



その時植えられたヒノキは、約二〇年を経た現在、学校を見下ろす位置にスクスクと成長を続けている。

（注一）「国土緑化五十年史」

六、学校林活用事業の拠点校

県下の高校では、ほとんどが学校林を所有していた。しかし大半の学校の学校林が植林はされたものの、その後はほとんど手が入らず、特に間伐の必要性はどこの学校林も急務となっていた。

昭和六二年（一九八七）、県教育委員会では、学校林をさらに活用することを目的に学校林活用推進事業を進めた。内容は県下の五地区に各一校ずつの推進拠点校を設置し、学校林の整備作業活動に必要な用具を整備し、各地区の高校の学校林活用に役立てるものであった。

本校は木曾地区の拠点校となり、ノコギリ一〇〇丁、鉋一〇〇丁、下刈り鎌七〇丁、ヘルメット一〇〇個が購入され、本校で管理しながら木曾高校や蘇南高校の利用を促していく立場となった。これを受けて、木曾高校では毎年の学有林作業が行われ、本校からは作業に応じた用具の貸出をしている。また、作業内容の指導などにも可能な限り林業科職員がアドバイスをするなど拠点校としての役割を十分果たした。

七、苗圃（苗畑）の変遷

創立六〇周年記念校舎全面改築工事によって、旧校舎正門付近の苗圃および寄宿舎西側の苗圃（寄宿舎東側の果樹園も含む）は、すべて新校舎の敷地やグラウンドに変わった。

加えて、戦後間もなく県道から二・三〇〇メートルほど登った処の苗圃（借地）も返却を余儀なくされていたため、本校の苗圃は、場所・面積共にすっかり変わった。

昭和三八年、県費によって新規に杭の原地区の水田を購入し、これを中心苗圃として整備を図ってきた。しかし五二年九月、長野県林業大学校建設のために、その用地の核として本校の中心的苗圃、二、四五一平方メートルを県林務部へ移管した。時の牧野嘉雄校長は、多大な犠牲も覚悟して林業大学の早期実現に尽力した。

牧野校長は新たな苗圃の確保と整備にとりかかり、五四年三月、面積一、〇八〇平方メートルの新苗圃の整備が完成した。しかし、何分にも土地の狭い杭の原での苗圃確保は容易ではなかった。

平成十三年現在、苗圃の状況は次のようである。

- ①面積 一九八五・九九平方メートル
 （うち県有地二二三・八〇m²、借地一七六二・一九m²）

②経営概要

桜苗木育成苗圃……………約四〇〇m²

三年生オオヤマザクラ苗仮植床
 五年生オオヤマザクラ苗仮植床

農業基礎ヒノキ苗圃……………約四〇〇m²

一年生ヒノキ苗床（約二五〇m²）

二年生ヒノキ苗床（約五〇m²）

三年生ヒノキ苗床（約五〇m²）

四年生ヒノキ苗床（約五〇m²）

農業基礎大豆作付け区……………約三〇〇m²

農業基礎トウモロコシ作付け区……………約四〇〇m²

農業基礎ユリ栽培試験区……………約一〇〇m²

コウヤマキ見本林（二十年生）……………約一〇〇m²

第六節 活発なPTA活動

一、全員参加のPTA

生徒の活躍を支えたものは、活発なPTA活動であった。東山校長のPTA改革以来活性化し、特に本校独自の総集会には毎回八割以上の保護者が参加し盛況であった。昭和五八年の場合は、次の通りである（『PTA会報』26号より）。

PTA総会（理事・代議員会） 五月十三日午後一時半より

岡本庄七会長挨拶

学校長挨拶

議事・昭和五七年度事業報告、会計報告、監査報告 承認

・昭和五八年度役員承認

会 長 岡本庄七（留任）

副会長 池戸健二

幹 事 原 昭（留任）、武居泰雄

・昭和五八年度事業計画、予算承認
 ・学校より近況報告（全般、進路、生活指導）

（午後五時半終了）

PTA総集会 六月十二日 出席率約九〇パーセント

全体会

図7-7 各年度のPTA総集会の出席率

先般行なわれたPTA総集会の出席率は下記の通りでした。
 （6月13日）

H R	生徒数	出席者数	出席率 (%)
1 A	34	33	97
B	34	31	91
C	38	35	92
2 A	42	37	88
B	42	36	85
C	43	37	86
3 A	42	37	88
B	42	39	93
C	41	36	88
合計	358	321	90
56年度	375	316	84
55年度	377	327	87
54年度	375	336	90
53年度	371	305	82
52年度	366	305	83

『学校だより』24号

・学校長より 生徒の学校生活、親のあり方（子供の教育）本校の特色等について
 ・生徒指導部より 服装、頭髪指導、自転車保険、自動車免許取得、交通事故防止、アルバイト指導、寮生下宿生指導、非行防止等について
 ・進路指導部より 昨年の進路状況等について
 学年PTA
 学級PTA
 個別懇談
 （午後五時過ぎ終了）

支部PTAも同様に高い出席率であった。やはり昭和五八年度を例にあげれば、次の通りであった。

図7-8 支部PTA総会

実施期日	支部	出席率
7月11日	福島	七二%
12日	上松	八五%
12日	日義	七〇%
18日	三岳・王滝	七八%
19日	木祖・檜川	六六%
21日	開田	九五%
22日	大桑・南木曾	八八%
25日	南信	一〇〇%
27日	中信	七八%
27日	東信	八六%
30日	東北	八六%

二、『学校だより』の発行

PTA活動を支えたものに『学校だより』の発行がある。毎回学校のPTA係によって、毎年二回（夏休み前、年度末）編集発行される。内容は学校の近況報告が主であるが、学校と家庭を結ぶ大きなきずなになっていった。

三、長野県西部地震

昭和五九年九月十四日午前八時四八分、突然長野県西部地震は起こった。特に王滝村に大きな被害が発生し、死者二九名を出す大惨事となった。その時の本校における様子を学校防災部



写7-47 PTA活動を支えた『学校だより』

主任佐々木弘文教頭は次のように述べる。

まったく思いがけない出来事であった。九月十四日始業間もない八時四八分、「ズシューン」という音と共に、机につかまるのがやつとという程の大きな揺れが来た。

次の瞬間机の下にもぐりこんでいた。その間にも、戸棚の上のもの、壁にかけられた額等がばらばらと落下する。

地震発生と共に奇声に近い生徒の悲鳴が本館に満ち、次の一瞬、音の全く消えた静寂が訪れた。

机の下の私の頭の中に、昭和十九年十二月の伊勢湾大地震の

状況が瞬間よぎった。

第一回の揺れがおさまると同時に校内放送機にかけつけたものの、停電のために放送不能。電話、テレビも中断、すぐ林業科の携帯マイクを借り、永原教務主任と手わけして、雨中ではあったが、生徒の安全を期して校庭への避難の放送を行う。

幸い教務室、事務室に一台づつ個人持ちの携帯ラジオがあったので、刻々情報を得る事ができた。五分足らずで校庭へ全員集合する。

早速人員を点呼し、学校長より、得た情報をもとに状況説明、今後の対策、心構え等について講話があり、余震のおさまった十数分後に、安全をほぼ確認したのち教室に復帰させる（雨中のため）。

電話回復後直ちに建設事務所、駅をはじめバス会社等交通機関への運行状況等問合せを行い、一応の状況把握の上で緊急職員会を開き情報伝達と対策について協議する。

先づ電車の状況は一時頃開通見込みとのことで、十二時に閉校を決定し生徒の下校対策を検討する。

王滝方面の生徒については、木曾高校では職員二名引率の上、林道を通り帰宅とのことであったが、本校では震源地に向かつて帰すことの危険性と明確な状況も不明であることも含め、合宿所への宿泊を決め、生徒全員の動向把握に努める。

十時十五分頃、再び大きな余震が襲う。三階の生徒の安全をはかり全員を体育館に避難させる。

再び駅より塩尻―坂下間の復旧が遅れるとの報に、急拠塩尻方面の生徒のためにバスをチャーターし、午後一時にバスで下校させる。名古屋方面の生徒については、家から迎えの自家用車合乗り、または路線バスにて下校させる。王滝村生徒については一時合宿所に避難させ、以後三十分毎に状況対策を説明する。

この間二回目の職員会を開き、宿泊生徒についての対策を協議する。（午後二時）、協議にもとづき午後三時より炊き出し品の注文にあたる。

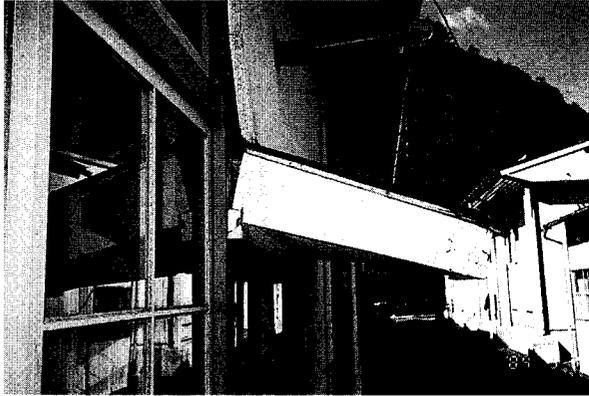
午後三時には、王滝村生徒、寮生四名以外全員下校、帰省する。四時頃より逐次生徒より無事帰宅の報告の電話連絡が、指導通り学校に入り、七時頃には全員無事帰宅を確認できた。

王滝村生徒二二名については、迎えの自家用車で帰宅したものの二名、福島、上松町等の親戚へ宿泊したものの四名、残り十四名は合宿所宿泊、自宅へ帰ったもの一名（二子持生徒）。夜間職員六名逐次菓子果物等持参し、宿泊生徒の慰安に来校す。

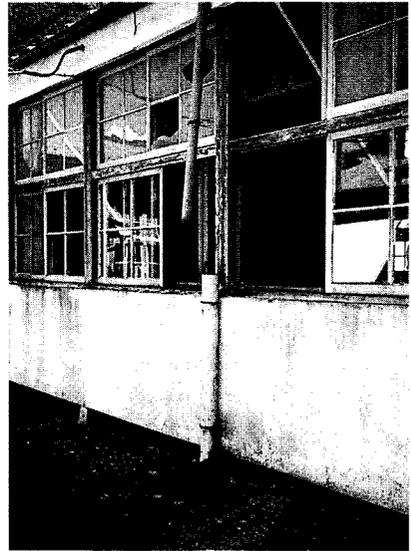
九月十五日休日。王滝村生徒も朝七時五十分、自家用車四台にて親が迎えに来る。生徒は一樣に心配のためと宿泊のつかれのために顔色がないものの、一先づ親の姿を見安心の様子、改めて家地域の状況を早く把握したい気持で帰途につく。九時五十分無事王滝についた旨の連絡あり。

以後在校職員により、校内被害状況の点検を行う。蛍光燈落下破損四本、廊下柱亀裂一ヶ所、第二林業棟壁亀裂一ヶ所、図

長野県西部地震による校内の被害



写7-49



写7-48

書館図書散乱、窓ガラス破壊五十数枚、サッシ破損二枚、苗畑擁壁四米亀裂、公用技師室壁脱落、演習林土砂崩壊等。当面直接授業実施には差障りない被害状況であった。

また本日より電報電話局より通信衛星による電話機器等運搬のため、校庭をヘリポートとして借用したい旨話あり朝より貸与する。

九月十六日朝八時二B岡庭長人君父広一氏行方不明との連絡あり無事発見されることを祈るのみ。

十七日月曜日より授業は再開されたが、十七日は短縮授業とし災害片付け、被害点検を行なった。再び王滝村生徒は通学できないので引き続き合宿所使用をせざるを得なかった。

食事は寄宿舎へ依頼できることは幸せであった。十七日六人、十八日十人、十九・二十日十三人、二十一日十四人、と宿泊は続いた。

二五日より修学旅行である。王滝村九名の二年生は、全員が出席できたことは不幸中の幸いであった。だがショックが抜けない中での旅行中の心境は如何なものであっただろうか。

この間十五日には県義務教育課、管財課、十六日十八日には高校教育課から見舞を兼ね視察に来校され、特に十八日は教育長までお見えになられた。

また王滝村からは、三回にわたり、宿泊救援物資が届けられ、特に日用品に生徒は喜びを示したようだ。また各高校、卒業生より沢山の御見舞の電話、葉書を頂きはげまされた。

さらに十九日には学校長はじめPTA会長共々被災地の視察及び御見舞いに王滝村にでかけられ、その惨状が報道や想像以上のものであったことに驚かれ、即日状況報告の職員会を開き、御見舞方法等の対策を協議した。

二二日には臨時PTA支部長会をもち、本年度のPTA研修旅行の中止を決定すると共に御見舞対策を決議した。本校生徒会等からも見舞金が寄せられ、王滝中学校生徒会に差し上げた。

『木曾山林高等学校PTA会報』28号(昭60・3・5)

第七節 進路指導の変化

経済の低成長、林業界の低迷、生徒の多様化など、本校を取り巻く状況は変化をみせ、それは進路指導にも大きな影響を与えるものであった。しかし本校生徒は、こうした状況に果敢に挑戦し健闘した。例えば昭和五七年(一九八二)の進路状況を、学校新聞は次のように報じている。

はじめて求人数の減少した今年の進路

木材、住宅産業など不況産業に直接関わりの深い、山林高校の就職戦線は、この数年来はじめて求人数が前の年に比し減少するという、厳しい状況下であったが誠実で勤勉との評価が定

着している山林高校卒業生ということで一月末で、八八パーセントが、次の職場に内定している。

林業科 営林局十名、国鉄五名など公務員が目立つ。

(県内)

長野営林局	8	長野県職	1
三岳村役場	1	国鉄	5
木曾電子	1	ワイド測量	1
信濃測地	1	林友	1
長野住宅	1	共立自動車	1
木曾駒カン	1	前田製作所	1
交安	1	西野機械	4
コパル光機	2	信州クボタ	1
TDK	1	帝国ピス	1
トヨタ南信	1	松電商事	1
名古屋製酪	2	トヨペット	1
立石石油	1		
(県外)			
東京営林局	2	建設省	1
東京郵政局	3	警視庁	1
養老の滝	1	三和建物	1
井関銘木	1	ホマレ電池	1
中津森林組合	1	小塚建設	1
名工建設	1	名古屋臨海	1

石田測量	1	ナカデン	1
一光	1	名古屋製酪	1
フジパン	1	オート小池	1
インテリア科	八割がインテ関連企業へ		
(県内)			
角藤建工	1	岩野商会	1
マツモク工	1	TDK	1
長野住宅	3	島幸建築	2
藤原印刷	1	アサカワ	1
川原家具	1	鉄道車輛	1
長野安全	1	宮嶋家具	1
長野トヨタ	1		
(県外)			
東京郵政局	1	岩本商店	1
三和建物	1	養老の滝	1
富山工務店	1	新宿増田屋	1
野原産業	1	伊藤製図	1
伴建築設計	1	建設省中部	1
カネジョー	1	笹徳印刷	2
愛知カリモク	1	カリモク	1
林テレンプ	1		
進学 林大推薦四名合格			
足利工大	1	福井工大	1

林業大学	4	国土建設	2
青山製図	1	東京体育	1
松本調理	1	辻調理	1
東海工専	2	デザイナー	1
中央工学校	1	日本工學院	1
畜産実科	1		
公務・公社一次合格延べ34名(昨年 20名)			
国公林業職	14	郵政外務	1
国公郵政職	6	長野県職	1
国公行政職	1	長野県警	1
国公土木職	1	警視庁	2
国公建築職	1	国鉄	6

この良い成績は目標を早くから決めて、それに向って精一杯の努力が実ったものである。

『木曾山林高校新聞』18号(昭57・3・6)